

目次

福田平八郎「漣」―画家のことばⅡ…………… 3

小奇 善通

菅浦―湖と生きる村を訪ねて…………… 11

吉村 俊昭

里山の民間信仰―仰木の地藏信仰について…………… 29

加藤 賢治

近江の懐^{ふとこころ}をめぐる…………… 43

石川 亮

福田平八郎「漣」——画家のことばⅡ——

小寄
善通

Name :

OZAKI Yoshiyuki

Title :

Fukuda Heihachiro's Sazanami: Words of the Painter II

Summary :

This paper is a study of the art historical significance of Sazanami, painted by Fukuda Heihachiro.

小奇 善通

最新刊の『文化誌近江学』第10号（琵琶湖特集号）に、大正昭和期を代表する日本画家の一人である福田平八郎（一八九二〜一九七四）の「漣」（大阪新美術館建設準備室蔵）について、主に画家のことばを引用して一文を執筆した。執筆の動機は、まずその作風の奇抜さにあった。昭和七年（一九三二）という東京でも、また京都においても新古典主義全盛の時期に、「漣」がなぜ描かれたのかを私なりに納得したかったという思いである。もう一つには、作品が琵琶湖を描いているという点である。琵琶湖のどこで描かれたものであるのかを確認したかったのであるが、これについては残念ながら今もって解決できていない。本稿は、字数の制約などから、ここでは触れなかったことについて少しの補足を行うのが目的である。引用した画家のことばについての検証や、「漣」の美術史的位置付けなどが主体となる。

以下少し、作品「漣」について要約してみる。

昭和七年九月、福田は帝展出品予定の作品を仕上げるため、十日間ほど琵琶湖を訪れ、翌十月、第十三回帝展に「漣」を出品している。「漣」は湖岸に寄せる漣に浮かぶ波紋のみを、絹

本プラチナ地に天然岩絵具の群青で、ほぼ原寸大に描いた額装の作品である。その斬新な作風から批評は毀誉褒貶相半ばした。当時、美術史家として著名な田中一松は「思い切った奇抜なもの、銀地の上にただ群青の色片を配列したのみで、他に一物もない。涼風に皺ばむ池面のあやに相違ないが、この浴衣地のよな画面に福田氏何の考うる所ありや。京洛の画人中では頭の人として一作毎に苦心を見せていた氏として、これは些か思案に過ぎて愚にかえるものと言いたい。」とまで評している。

「漣」の作風の特徴を箇条書きにしてみると、およそ次のようになろう。

- 1 デザイン的に見えるが、実は現地写生をもとにした写実的な作風
 - 2 プラチナ地というメタリックな画面
 - 3 単一モチーフで彩色は波紋を描く群青のみ
 - 4 輪郭線を用いない
 - 5 ほぼ原寸大に描かれている
 - 6 額装である
 - 7 水平線は画面上部外に設定
 - 8 謹直な落款書体
- ここでは、これらの項目について検討を加えてみたい。

1、デザイン的に見えるが、実は現地写生をもとにした写実的な作風

福田は、絵画専門学校卒業の折に同校の美学・美術史の教授であった中井宗太郎から助言を受けているが、これについてのちに「君は自然を客観的にみつめてゆく方がよくはないか、といわれ、この言葉を羅針盤としてその後進んだ」と語っている（註1）。また昭和三六年、福田が文化勲章を受けた際には「私はだいたいリアルを信念として貫く方向をたどったが、宗達などの琳派が好きなのだから、どうかすると装飾の方に走りたがる」とも記者に語っている（註2）。福田が写実性を大切にしていたことはこれまでの先学の研究からもよく知られていることであり、先述の拙稿にも掲載した琵琶湖の波紋の写真（図1）からも実証される。

さらに「漣」制作の前年、昭和六年九月に刊行された「今の私の方向」（『アトリエ』第八巻第九号）のなかに福田による次のような一文がある（傍線は本稿筆者による）。

私は恠うした境地から見て、今では差当り画風を一遍に換えたいとか、特に恠う云う風な希望で描いて見たいとか、そう云う気持ちはなくなつて、何処でもいいから自然の一部を切り取つて、純な気持で描こうと云う気持丈している。尚よく考えて見ると、そうした気持が全然無くなつてると云う訳でもあるまいが、例えばある技巧が特に巧くなつたと云う気持から夢中になつて仕事の為に仕事をしてる様な、

そうした引摺られてる様な生活をしたとは思わない。

だから、今年など実は何を描こうと云う用意がなくて、出品に掛らねばならない時期が来た時、日常見てるそのらの草や木や花や野菜や、何でもいから其中の面白いと思つたものを描いて見ようと思うと云うのが現在の気持だ。それの方がのんびりしていて、こだわりの無い愉快なものがある様に思う。

自然を見た儘と云う処が尊いと思ひ、そうした気持を続けて行きたいと思う。今迄にしてもそうだった積りなのはどうも夫れがいつとなく阻碍されていたのだと思う。

何処でも何でもいいからと言って、矢張りそこには私の選り好みがある。何でもが其儘絵になる、何処でも絵にしよう、と云う自由なこだわりの無い境地に辿り着き度いと思ひながら、まだ却々行きつけないでいる。

福田のこうした純粹な姿勢から生まれたのが、「漣」であつたのである。

「漣」に描かれる波紋は本稿筆者の観察では、遊覧船などの高さからでは見えず、また逆光では難しい。浜辺にたたずみ、穏やかに寄せるさざ波に目を向けるとき、そこに見えるのが「漣」の波紋なのである。そして、さざ波は透切れることなく次々と浜辺に寄せるが、その波紋は決して同一ではない。福田はさざ波や波紋に対峙し、観察し、そして自分の感性の納得のいく波紋を探し、その見たままを写生したことは間違いない。

福田の代表作の一つに「水」(昭和三三年、大分県立美術館蔵)があるが、これについても本稿筆者は現地写生に基づく写実性の強い作品であると考えており、こちらは幽谷の淵を観察したものと推測する。図2はたまたま滋賀県下の谷筋(日野町のしゃくなげ溪)で撮影したものであるが、瞬時に福田の「水」を想起した。

右記のような福田の作品は一見デザイン化されたもののように見える。それは、福田自身が「装飾の方に走りたがる」というように、福田のフィルターを通した写実であるからであろう。多面性のある現実から装飾的な瞬間を写し取ってきたもの、と云うてよい。デザイン的に見えてしまうのは、私たちが福田は



図1 琵琶湖湖岸(長浜市)にて撮影(筆者)



図2 滋賀県日野町しゃくなげ溪にて撮影(筆者)

どの目で現実を見ることができていないからであろう。福田の作品は私たちの目を試しているのである。

福田自身が色や線について語ったことばが「私の写生帖一（『三彩』第三四号 昭和二年九月）のなかに残されている（傍線は本稿筆者による）。

2 プラチナ地というメタリックな画面

3 単一モチーフで彩色は波紋を描く群青のみ

4 輪郭線を用いない

福田は先述したように「宗達などの琳派が好きなのだから、どうかすると装飾の方に走りたがる」と話しているが、金地、銀地といった作品は実は「漣」以外、寡聞にして知らない。展覧会出品作としては「漣」以外恐らく皆無であろう。この点だけを見ても、福田にとって「漣」が特殊な位置を占めていることは疑えない。

また、メタリックな画面に群青一色で単一のモチーフを描き、輪郭線を用いない点にも注目すると、これは福田自身が言うように琳派の作品からの影響が顕著であるといえる。画面全面に箔を貼り、ほぼ単一のモチーフを数少ない色数で、輪郭線を用いずに描く作品を日本美術史上に探すと、例えば俵屋宗達の「鳶の細道図屏風」（相国寺承天閣美術館蔵）や尾形光琳の「燕子花図屏風」（根津美術館蔵）がすぐさま想起される。また、メタリックな素材を用いて、数少ないモチーフを描くものとして宗達の「鶴下絵和歌巻」（京都国立博物館蔵）や「光悦謡本（嵯峨本）」なども近い距離にあるように思われる。こうした琳派の作品が福田の感性を涵養したといえるであろう。

私は写生をするのに主に色鉛筆を使って居る。写生の対象から、先ず何を一番感ずるかと言うと、形や線よりも先に色彩を強く感ずる。花や鳥の色彩の形とは、もともと分つことのできない関係にあるわけだが、はつと注意した時、先ず色の方に強く刺激されるのが自然だろうと思う。また、われわれのように、近代的な教育を受け、殊に西欧の近代美術に親んで、そこからいろいろと影響されて来た者は、むかしの人と違って感覚のはたらきも変つて来て居るから、どうしても、対象の色彩を強く感ずることになる。

そこで私は、一番強く刺激を受けた対象の色彩を追求する。そして、この色彩を追求して居ると、自然に対象の形を捉えることができる。それを私は、色鉛筆を使って自由にやつて居る。また、直接写生帖へ最初から絵具でやることもある。対象物の本質がよく判つて来ると、その本質を表現するには、時にどう言う線がよいか、と言うことを研究することになる。

線と言うものは、つまり、あらゆる物の本質を、柔かい物は柔かいように、堅いものは堅いようにそれぞれの本質を表現する手段であるから、対象をよく感受し観察して、自分で創るべきものだと思う。

これにより考えられることは、「漣」は色彩の追求から始まった作品であるが、その波紋は彼にとっては線であったのではないかとということである。輪郭線は確かに認められないが、波紋を描く柔らかな群青は福田にとっては線の表現であったのである。これは後の代表作「雨」（昭和二十八年、東京国立近代美術館蔵）の堅い瓦の形を写し出すシャープな黒い影の描写にも当てはまることである。

5 ほぼ原寸大に描かれている

原寸大に近い大きさに描くこと、これは写実性の追求とつながってくる要素である。ありのままに描きとろうとするには、大きさまで同じにすることは有利に働く。福田は若年期に中国の宋元風院体花鳥画に範をとった「牡丹」、桃山障壁画に倣った「閑庭待春」などの作品を残しているが、これらに既に福田の原寸大志向が表れていると考えることもできる。福田の後の代表作「新雪」や「雨」などでも、飛び石や瓦は実物を髣髴とさせる大きさに描かれていることも見逃せない。

6 額装である

この点は、福田の琳派志向と無縁ではない。「漣」は一見して琳派の二曲屏風の画面形態に倣ったものと認識できる。琳派の装飾的な構図は画面の枠を意識した構成である。福田は「漣」を額装とすることで、琳派の構図をより効果的に見せている。

日本画の画面形態は明治以降、日本人の生活様式の変化のなかで、襖、屏風、軸装といった伝統的なものから、額装へと変化していった。同時に余白のあり方も変化し、写実を基盤にしながらも装飾的な作風をもつ福田の作風が戦後も引き続き高い評価を得たのも、額装を意識した作風であったことと強く関連するように思われる。

7 水平線は画面上部外に設定

8 謹直な落款書体

水平線を画面上部外に設定していることや、謹直な落款書体については、画面全体の構成や技法とも関連させながら、当時流行していた新古典主義との関係のなかで捉えてみようと思う。一般的に、大正末から昭和初めにかけて完成された新古典主義は、再興日本美術院の第二世代である前田青邨、小林古径、安田靉彦、速水御舟らが大和絵研究の先にめざしたものとされ、近代の写実性と日本画のもつ伝統的な装飾性を備えた上での、観念的で精神性の高い境地を目指したものを指す。京都画壇においても土田麦僊、菊池契月、徳岡神泉らがその旗手とされ、福田も昭和に入ってから「茄子」（大分県立美術館蔵）や「菊」（京都市美術館蔵）といった新古典主義の作品を制作している。これら新古典主義の特徴としてよく指摘されるのは、明快な色調と構図、細やかで強靱な線描であり、それらに伴って表出される理知的で感情を抑制した作風といったところであろう。

「漣」をこうした新古典主義の作風に照らし合わせてみると、福田の主張がより明快になってくるように思う。「漣」はプラチナ箔の銀色と群青のみという、極めてシンプルな色調からなり、図様もさざ波に浮かぶ波紋のみという明快さを示している。水平線が画面上部外に設定されているのも、この明快さを際立たせるためのものである。この点では「漣」は新古典主義の作風に沿ったものといえる。背地にメタリックな素材を使用する作品は、新古典主義の作品には少ないが、「漣」より三年早い昭和四年（一九二九）に速水御舟が発表した「名樹散椿」（山種美術館蔵）に前例がある。

また、理知的で感情を抑制した作風という点においては、写実に徹した「漣」の作風は正に合致したものといえる。また福田の落款書体は、大正末年ころから、それまでの抑揚のある、ややぼつとりとしたものから、謹直なものに変化している。「漣」も例外ではない。これも、理知的で感情を抑制した作風を意識したうえで福田なりの変化だったと思われる。

「漣」がいわゆる新古典主義と明らかに異なる点は、先に指摘した要素のなかで、細やかで強靱な線描の有無という点である。「漣」には新古典主義の画家たちが使用しているような細やかな線は無い。ここが、田中一松が批判した点であり、同時に福田がこだわった自己主張であったはずである。先に記したように、福田は色彩の人である。福田は「漣」制作にあたって、それを明快に追求しようとしたのであろう。線は使用せず、色

彩で形を表現するという自らが目指す作風の表明であり、時流に流されないという決意表明の作品であったのかもしれない。

戦後、日本画革新が様々な形で行われ、数多くの団体が結成されていくなかでも、福田作品の新鮮さは失われることはなかった。福田の代表作である「雨」、「水」は戦後の日本画壇が生んだ傑作である。それらが生まれたスタート地点に「漣」は位置する。「漣」は新古典主義の次なる方向性を示した記念碑的作品だったといえよう。

註

註1 「大正の頃」福田平八郎 『日本美術』第二巻第五号 昭和十八年五月

註2 「文化勲章の人々(1)福田平八郎 一作ごとに苦しみ」『朝日新聞』昭和三十八年十月二〇日

菅浦
―湖と生きる村を訪ねて―

吉村
俊昭

Name :
YOSHIMURA Toshiaki

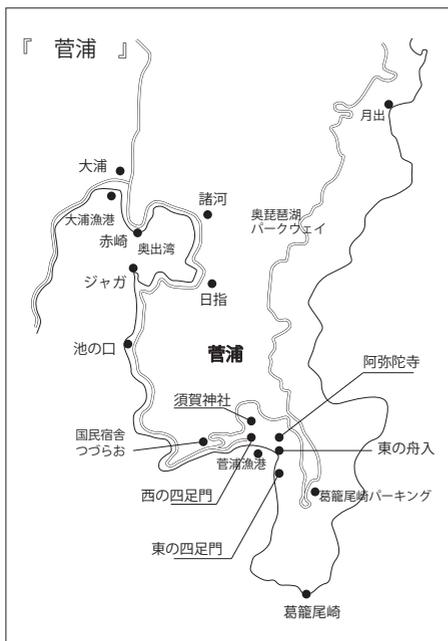
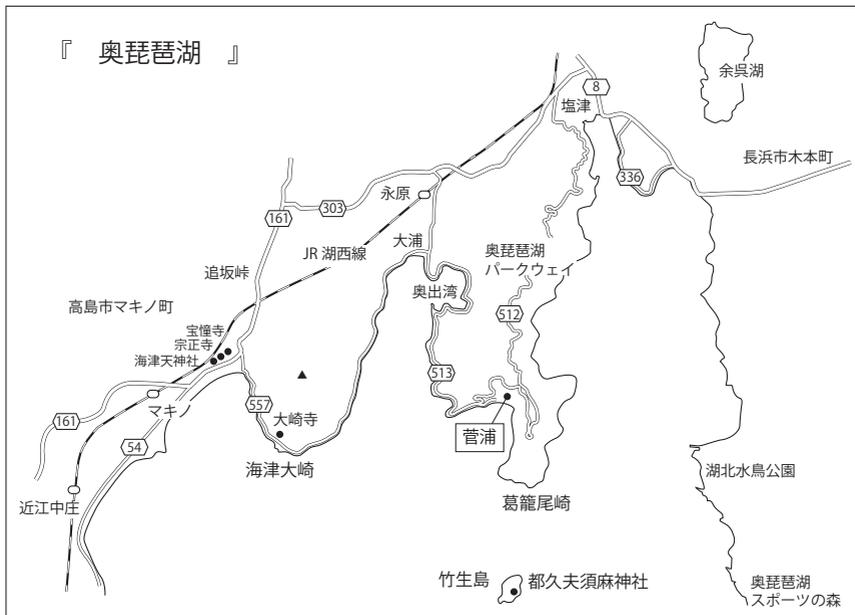
Title :
Sugaura: A Visit to a Village Where Life is Closely Interwoven
with Lake Biwa

Summary :
Lake Biwa encompasses one sixth of the area of Shiga Prefecture and has played a vital part in the lives of people of Shiga since ancient times. Lake Biwa is well known as an important tourism resource. However, the people who live by the lake and depend on it for their livelihoods are given little mention. Okubiwako, the northernmost area of Lake Biwa, is a breathtakingly beautiful area, with a very long, very rich culture but public transportation to the area is limited and access is inconvenient, making it even more remote. In this paper I will present a survey of Sugaura, a village in Okubiwako. This village, which was mentioned in poems of Man'yōshū centuries ago, has its own unique customs and culture that have been preserved to the present. In this survey I examine the lifestyle of the people of Sugaura, whose existence is intricately interwoven with Lake Biwa, examining the period of the recent past to the present day.

一、はじめに

滋賀県の六分の一を占める日本最大の湖である琵琶湖は、最も狭い部分に架かる琵琶湖大橋を境に「南湖」と「北湖」に分かれる。水深も浅く対岸まで三キロ余りの南湖は六七〇平方キロメートルある琵琶湖のわずか八パーセントほどである。北湖は「ウミ」と呼ぶにふさわしく広大で琵琶湖の大半を占めるが、湖の東、西、北で湖岸の様相は大きく変わる。明治時代以降に大規模な干拓や護岸などで湖岸は人の手が加わり、東岸、南岸にみられる人工湖岸は湖岸の三七パーセントにのぼる。それに比べ北部の湖岸は、山が湖にせり出す山地湖岸が大半で、全湖岸線のうちの十七パーセント、四十キロメートル余りある山地湖岸の大半を占めている（滋賀県「琵琶湖ハンドブック」『湖岸』）。滋賀県の南部、東部に比べ平地は少なく、気候的には北陸、日本海気候であり今では辺鄙な地域の印象がぬぐえないが、明治初期までは若狭と京都、大阪を結ぶ琵琶湖水運の要で「塩津」「大浦」「菅浦」といった港があり、湖北の人々が重要な水運を担ってきた。

リゾート地として湖岸が開発されてきた大津、草津、彦根、



長浜などといった湖南、湖東からみる琵琶湖は葭原、湖越しに湖西の山々を望む穏やかで優しげな風景を連想するが、湖西の高島市北部の海津（高島市マキノ町）に至ると湖岸の様相が一変する。海津から高月町片山（長浜市）に至る琵琶湖最北部の奥琵琶湖と呼ばれる地域は、平野部が少なく山から一気に琵琶湖に落ち込む、まるでフィヨルドのような地形である。その奥琵琶湖の中ほどあたり、湖に突き出た葛籠尾崎の西側部分に菅浦（長浜市西浅井町）という集落がある。万葉集にも詠われ中世の古文書「菅浦文書」で知られる菅浦である。最近では平成二十八年に、重要文化的景観として「菅浦の湖岸集落景観」が

選定されたところだ。湖上交通がさびれて一時は陸の孤島といわれた僻村であるが、かつては琵琶湖とともに生き、水運の担い手としてまた漁民として暮らしてきた。そこで、今日の「菅浦」の人々の暮らしぶりが知りたく話を伺いに訪れた。

二、大浦から菅浦の景観

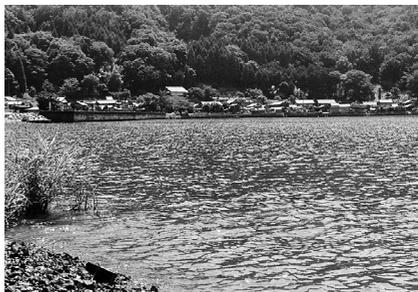
湖西の北の端、桜で有名な海津から湖岸に沿って進むと大浦（長浜市西浅井町）を経て菅浦に至る。奥琵琶湖の景観を楽しめるルートだ。海津から大崎寺（高島市マキノ町海津）、海津大崎を経て大浦に至る桜並木の美しい湖岸沿いの道があるが、遠回りして追坂峠からJR永原駅、大浦に至る道を行く。大浦の町はずれ大浦漁港から先が菅浦である。大きく入り込んだ琵琶湖は、静かな湖面に山容を映して琵琶湖の雰囲気からは程遠い印象である。大浦と菅浦の境界から十九キロ弱が菅浦の観光産業に大きな影響を与えた奥琵琶湖パークウェイとなる。赤崎を回り込むと奥出湾が見える。以前は赤崎から湾を挟んで対岸の突き出したジャガ（蛇賀）との間には「こわたし」という渡しがあった。左手谷筋に沿って開けた田んぼがある。中世に大浦と土地を争った「諸河」という農地である。「奥手浜」にも同じく騒動のもととなった「日指」の農地があり、今では農地改良で整った田んぼが谷いっぱいに広がっている。避難港として使われている池の口を過ぎるとほどなく湖の視界が開け、琵琶

湖らしい景色が戻ってくる。「竹生島」が見えてくれば菅浦の集落は近い。

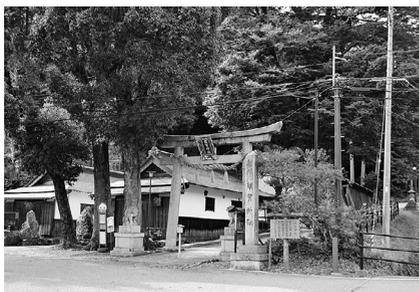
陸の孤島とは思えない観光地らしいレストランと国民宿舎「つづらお」が現れる。ここで奥琵琶湖パークウェイと別れ、菅浦の人々に副収入をもたらした「ヤンマー家庭工場」の一つを過ぎるとすぐに「須賀神社」の大きいようが目にとまる。菅浦の集落である。湖岸横の駐車場は老人会の方々が清掃にあたっておられた。須賀神社参道横の御供所の左に、葭葺の「西の四足門」がある。遠く湾の向こう集落の右端には「東の四足門」が見える。この東西の門に挟まれた集落が菅浦の村である。集落の中ほどに景観に似合わないコンクリートで囲まれた船溜まりがある。昭和五四年（一九七九）に滋賀県の「新沿岸漁業構造改善事業」で築港された船溜まりは、菅浦の景観の一つであった東西の「舟入」の埋め立てにつながったという。その手前に猫の額ほどの砂利浜があり、三メートルほどの長さの橋板が三ヶ所湖に突き出ている。地元では「ウマ」と呼び、水汲みや洗い場などとして利用されているそうだ。小さな二人の子供とその祖父らしき人物が水遊びに興じていた。母親らしき女性が「ウマ」に腰かけて見守っている。日常生活が垣間見られる光景である。



台風時などで避難港として使われている「池の口」



菅浦の集落 山と湖の狭間に民家が立ち並ぶ



「須賀神社」鳥居と御供所、その奥に神輿堂がある



菅浦文書に登場する奥出湾に面した「日指」の農地

三、菅浦の集落と聞き取り

まず、「須賀神社」に参拝する。昭和二七年（一九五二）の付け替えて一気に琵琶湖に下る小出川沿いに参道が伸びる。きれいに整備された石畳が終わるところに手水舎があり、苔むした水石の階段が拝殿に向かっていている。参拝の氏子はこれより裸足になる。神への敬虔さの顕れである。また、菅浦では船には濡れた床で滑らないよう裸足で乗っていた。菅浦では船は重要な交通手段であり、その生活習慣から船形古墳（淳仁天皇御陵と伝わる）のある神社全体を船に見立てて裸足になったとも聞く。一般参拝者もスリッパに履き替えるとの張り紙があり、貸し出しのスリッパをお借りする。

須賀神社は、明治三九年（一九〇六）の「神社合祀令」に基づき、明治四二年（一九〇九）に元々あった「小林神社」、「赤崎神社」、「保良神社」の三社を合祀したもので、「本殿覆屋」内に向かって右側の東殿に淳仁天皇を祭神とする保良神社、左側の西殿に小林神社と赤崎神社を祀っている。平成二五年に千二百五十年祭が行われ、境内はきれいに整備されている。菅浦の人々と須賀神社の強いつながりを感じながら参拝を終え、参道途中の「菅浦郷土史料館」に向かった。

郷土史料館は、菅浦の方々により運営され日曜日のみ開館している。事前に連絡しておいたので平日にもかかわらず開館いただいた。一室には須賀神社関連の棟札、絵馬、中世の惣に関

わる資料などが展示され、奥の一室には民具が展示されている。今年の運営を担当されている藤井泉三氏に案内いただき、合わせて菅浦の昭和、平成の生活について伺った。話の後で、菅浦の歴史については阿弥陀寺住職秋山富男氏を勧められ、日を改めて秋山住職より話を伺うことにする。

藤井氏から菅浦の人口が減少し高齢化していると伺っていた。七月、昼時の暑い時間帯であったとはいえ集落には人影が見えず静まっている。集落西端の道祖神から景観を代表する「波除石垣」に沿って集落の中ほどを「東の舟入」跡に向かう。昔ながらの風情の残る民家の中には、新しく立て替えられた今日風の民家やプレハブのヤンマー家庭工場が存在する。もし潮の香りが加われば、琵琶湖岸の集落というよりも日本海に面したうつくしい漁村の印象である。「阿弥陀寺」までは三百メートルほど、立派な穴太積みの石垣の上に大きな枝垂れ桜があり本堂が建っている。さらに道沿いに二百メートルほどで東の舟入に着く。東の四足門までは湖岸沿いにさらに三百メートルほど先になる。ここで折り返し湖岸横の浜通りと呼ばれる道を通って西の四足門に戻った。

改めて菅浦を訪れ秋山住職に話を伺う。まず、割烹旅館佐吉を営んでいられる岩佐達巳氏を訪れ菅浦の食文化について話を伺うことにしていたが、当方の連絡不手際で訪問時間が重なってしまいご住職に迷惑をかけたが、二時間余りにわたって菅浦の歴史と人々の生活について丁寧なお話をいただいた。佐吉の



「西の四足門」、集落の境を示す。



「須賀神社」、ミズイシの敷かれた階段。正面は拝殿



東の境には同様の「東の四足門」がある(写真:寿福滋)



「菅浦郷史資料館」、通常は日曜日のみ開館

岩佐氏については後日、「琵琶湖と食文化」「菅のまつり」について、これも二時間余りお話をいただく機会を得た。

菅浦郷土史料館の藤井泉三氏、阿弥陀寺住職秋山富男氏、割烹旅館佐吉の岩佐達己氏、各氏のお話は、菅浦の千数百年間という歴史時間に凝縮され、内容豊かで多岐にわたった。

四、菅浦の今昔

菅浦は百二十軒余りの民家があるが、生活しているのは五十数軒で百二十名ほどである。村内に産業となるものが少なく、菅浦を離れて勤務している人が多い。また利便性を考えて菅浦に家がありながら、町の近くに別に家を建ててしていると聞く。そのため、菅浦の集落としては高齢化が著しいという。住民の足であるバス路線も一日に三本しかなく、過去には船が頼りであった菅浦であるが、今では自家用車が重要な交通手段になっている。昨年までは小さいながらも商店があったが、若い人たちが村外で日用品を購入して帰るので、村内では商売がなりゆかなくなった。今は、週に一回移動販売車が来るものの年配者には生活がしにくい状況になっているようだ。通りからは子供たちの声がしない菅浦だが、保育園児一名、幼稚園児一名がいるとのことである。漁業専従者は二三名で五、六人がサラリーマンとの兼業で従事している。一九六〇年代から続くヤンマー家庭工場は今も十カ所ほどが稼働している。

菅浦の農業

現在、村内の畑地は極端に少ない。藤井氏の話では、今の景観からは想像できないが、村の収入源であった薪や、灯火用や油紙塗料の油をとる油桐あぶらごぎに代わって、船で輸送できる利便性から湖北の養蚕農家への出荷用の桑の栽培が盛んになり、明治後期から昭和前期まで集落の周囲は桑畑が広がっていたという。村での養蚕は産業となるほどでもなく家庭で使う程度であった。稲作は、中世から始まった隣村の大浦との土地争いでわかるように、平地のない菅浦は田んぼの確保に腐心してきた。稲作は奥出湾の日指・諸河の地で行われているが、昭和前期までは、稲を干すのに奥出湾の内側は風通しの悪さがあり、稲の運搬に舟を利用していただけことから、日当たりの良い集落前の狭い礫浜にハサ杭を立てて稲干しをしていた。農業においても琵琶湖の存在が大きく関わってきたという。ハサ杭に使う栗の木とハサ竹も重要な商品であった。またハサ竹用の真竹は竹細工や剣道の防具の胴や竹刀としても商品化されていた。それも近年は利用されずに竹藪は荒れているという。南向きに湖に面して湖北の中でも暖かいことから、ミカン、ビワなど果樹の栽培も行われてきたが、近年はイノシシ、サル、シカなどによる食害がひどいらしい。

菅浦の漁業

明治時代までは魚を取っても商売としては成り立ちにくく、

漁師はまずしい暮らしを余儀なくしていた。漁業が商売となるのは大正時代になってからで、昭和に入り道路が開通してからは商品の「稚アユ」輸送のトラックが水替えをしながら輸送したという。その頃は毎年十月になると、遡上できないまま死んでいくアユで浜が黒くなったらしい。

昭和後期高度成長期に琵琶湖の水質が悪化した。いくら改善されて琵琶湖の中でも奥琵琶湖は、窒素やリンの値は低く透明度も高いといえるが（滋賀県『琵琶湖ハンドブック』『水質の変化』）、過去の水質を知っている藤井氏に言わせれば飲み水にも使えた昔の水質からは程遠いという。水質の変化に合わせたように琵琶湖での漁獲量が二〇〇二年統計では五十年間で五分の一まで減少し（前掲『漁業』）、輸入魚の増加、食生活の変化による魚離れなどと相まって、滋賀県の漁業従事者もここ五十年ほどで四分の一にまで減少した（滋賀県『琵琶湖と暮らし二〇一五』）。菅浦の漁師も大幅に減ったという。



東西にあった東の「船溜まり(舟入り)」跡



「菅浦漁港」。新しく作られた船溜まり



集落の西側に立つ「ヤンマー家庭工場」。集落内のものはもっと小規模である

奥琵琶湖の魚

琵琶湖北湖の中でも水がきれいで七〇メートルもの水深のある竹生島周辺は好漁場である。

昼前に船溜まりから船が出ていった。沖合の作業を終え戻ってきたので何がとれたか聞いてみると、「アミエビ」とそつけない返事であった。小さな船倉にはコエビが泳いでいた。沖の生簀いばすから持ち帰った「スジエビ」である。スジエビをアミエビと呼ぶのか。「エビ豆」やかき揚げの味を思い出した。

割烹旅館佐吉で淡海の宝石といわれる「ピワマス」の刺身、焼き物、味噌汁などいただいた。くせがなく脂ののった甘みのある味は、絶品といえる旨さであった。琵琶湖固有種で体長は

四、五〇センチになるといふ。湖西では「アメノイオ」と呼ぶが、菅浦では「マス」と呼んでいる。漁は六月から九月にかけて刺網か一本釣りトロールで行われているとのこと。米原市醒井養鱒場（米原市上丹生）で養殖も行われているが、まだまだ流通量は少ないと聞く。

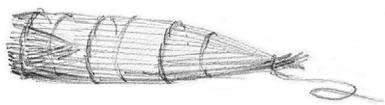
店の生簀に十匹を超す「イワトコナマス」と在来種の「コイ」が活けられていた。在来の天然コイは少ないとのこと。イワトコナマスはナマスよりスリムでグレーがかつた体にまだら模様がある。体長は三、四十センチ。澄んだ水の水深のある岩盤の場所を好むという。漁法は刺網や一本釣りが主で、五、六月には産卵のためアシ原の浅瀬にあがってくると聞く。刺身やかば焼が旨いらしいが食す機会はなかった。

モンドリやタツベなどの漁具を用いてたくさんとれていた、「ギギ」や「テナガエビ」は取れなくなったという。特にギギはここ十年ほど見かけていないとのことであった。よく知られる「ワカサギ」は琵琶湖の在来種ではなく菅浦では漁を行っていない。

今年「アユ」が不漁らしい。天候のせいで琵琶湖低層部の水の循環が悪く酸素不足になっているとのことである。水質改善、アシ原の再生や水産資源回復の放流が盛んに行われているが、人の力は小さく自然の影響力が一番大きいと感じさせられた。



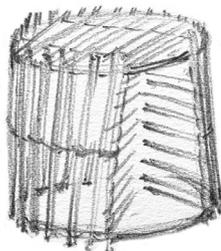
「スジエビ」の漁を終えて戻った漁船



「モンドリ」。浅瀬に仕掛けられる竹製の漁具



割烹旅館佐吉の生簀の魚。「イワトコナマスとコイ」



「タツベ」。浅瀬に仕掛けられる竹製の漁具

琵琶湖と観光

昭和四六年（一九七二）に菅浦の山腹を横切り月出に至る展望を売りにした「奥琵琶湖パークウェイ」が開通した。これがきっかけで観光客が多く訪れるようになり、「民宿」が四軒も開業したという。それも次第に観光客は減少し、最後に残った民宿も宿泊をやめて仕出しのみ営業されているという。

現在菅浦で宿泊できるのは四代続く割烹旅館佐吉だけとなっている。客層は「集落景観の観光」と「琵琶湖の魚料理」や「鴨料理」を目当てに来ているとのこと。鴨は琵琶湖の冬の特産物であり独特の「モチ網猟」が知られていたが、昭和三十九年（一九六四）琵琶湖の鴨猟が全面禁止になり、琵琶湖産天然鴨はない。しかしながら昭和五七年から奥出浜で「マガモの養殖」が行われ、年間四千羽ほど出荷されている。佐吉の鴨はこれを使っているとのことである。現在ではパークウェイによる観光のにぎわいは影を潜め、落ち着いた琵琶湖畔の漁村のたたくまの集落を散策して歴史文化に思いを巡らせ、琵琶湖の授かりものを食す観光地に変貌したと思える。

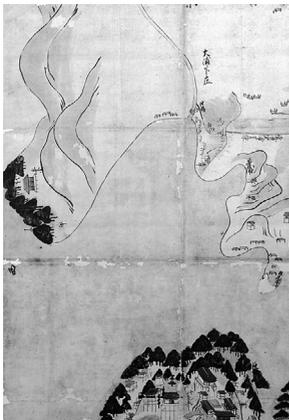
民宿に選れて昭和五〇年（一九七五）「国民宿舎つづらお荘」が開業した。国民宿舎ブームにあやかっただけの開業であつたがブームも去り十年余りで閉鎖された。その後、地元の要望で有限会社として再出発して「国民宿舎つづらお」として今に至っている。菅浦は竹生島へのロープウェイ建設など思いもよらない観光開発が考えられたが、村民は景観を守ってきた。環境問

題評論家の富山和子氏は『水の文化史』で「湖北の菅浦は、一度訪れたら決して忘れられないほどにみやびやかな漁村であった。」と記している。琵琶湖の重要な文化的景観に指定され新たな観光資源が加わったこと、ボランティアの方々による集落の案内、解説がされるようになったことで訪れる人も増えるのではないだろうか。

竹生島と菅浦

琵琶湖の孤島といった趣の「竹生島（長浜市早崎町）」であるが、菅浦から四キロメートルほど、葛籠尾崎からは直線二キロメートルしかない。現在、竹生島を訪れるには西側の今津港（高島市今津町今津）または東側の長浜港（長浜市港町）から乗船するが、昭和初期には琵琶湖汽船の前身である太湖汽船が天津から湖西を経て海津、大浦、菅浦、竹生島、長浜といった航路で運航されていた。そのころまで菅浦は竹生島の一歩最寄りの港であつた（長浜市教育委員会「菅浦の湖岸集落景観保存活用計画報告書」）。

竹生島は奈良時代に行基上人



14～15世紀のものだとされる「菅浦絵図（部分）」。図中の島は「竹生島」

により開基されたと伝えられる信仰の島であるが、菅浦とのつながりは戦国時代にはすでにみえる。江戸時代中期に編纂された『近江輿地志略』には、巻の八十七浅井郡第四菅浦村で竹生島が詳細にとりあげられ、葛籠尾へ十八町の距離にあると記されている。また菅浦には阿弥陀寺を含め四カ寺四坊一庵の名が記され、

そのうち四坊は竹生島の寺院末寺となっている（大正時代にはすでに四坊はなくなっている）。現在の竹生島は琵琶湖東岸の奥琵琶湖スポーツの森と同じ行政区域になっているが、過去には所領、廻船、宗教などさまざまな形で菅浦と強い繋がりがあったことがうかがわれる。

石垣のある景観

菅浦の景観として石垣がある。その一つに村を琵琶湖の波から守る「波除石垣」がある。波除といってもたかが湖の波と違うが、藤井氏によると台風の時や軽々と石垣を超え家の中まで水が入ってきたことがあったという。今では、船溜まりの堤防



菅浦から見える「竹生島」。よくみる竹生島の写真の裏側（北側）になる



湖に面した強固な石垣。「物置（モノオキ）」と呼ばれている



民家の前に作られた「波除石垣」。垂直に積み重ねられている

ができたおかげでそのようなことはないらしい。浜に面して民家との間に「物置」と呼ぶ大石を使った石垣群がある。現在は、小さな畑地になっていたり納屋が建っているが、これが波除として一番重要な石垣であった。二メートルほどの厚みがあり頑丈な作りである。集落の道に沿って民家を囲むように小さめの石を積んだ石垣がある。高さは高いものでも一メートルほどで物置に比べて厚みはない。物置を越えた波をさらに防ぐために積み上げられたものだ。一部通路幅に切り込みがあり、非常時のみ「波止め板」を差し込んで波を防いでいたという。他に菅浦の石垣には、狭小な土地を利用するため「盛り土の石垣」がある。阿弥陀寺の石垣は特に立派だが、高台の社寺や民家に見

ることができ
る。また、山からすぐ湖につながる菅浦では、集落の中の山と湖を結ぶ南北の道は水が出ると川に変わる。整備された現在では見分けにくいのが、波除とは別に川の水を防ぐ石垣も見られる。



「波除石垣」。出入りに開口部があり板が差し込まれるようになっている



「阿弥陀寺」の穴太積みの石垣。特に立派な「盛り土の石垣」である



旧小出川沿いの「越流防止の石垣」



湧水を利用するために作られた「イド」



浜に作られた「ウマ」。昭和36年に水道ができるまで日常的に使用されていた

水の習俗

現在は、須賀神社の脇に上水道の水源があり全戸に水道がひかれている。昭和の中頃までは、谷水や湧水と琵琶湖の水を飲用に使っていた。湧水場所や水路沿いに設けられた「イド」と呼ぶ場所では、仏所用、飲用、洗い物など「上の水」、「下の水」として厳密に区別され、琵琶湖の水利用も同様に使用する浜の場所が決められていたという。秋山住職によれば、昭和の戦時中に疎開してきた人がこのような水の使い分けを知らずに騒動になったこともあったらしい。琵琶湖での水汲みや洗い物には「ウマ」が利用された。現在も船溜まり西側の浜にウマを見ることができ、ながらも使用していなかったものを近年

復活させたという。

菅浦においての水利用は資源を有効に利用する生活様式として成り立ってきたといえる。水道がひかれて生活様式が大きく変わったが、著しく水利用が変化したのは奥琵琶湖パークウェイと砂防ダムなどの治水事業によるところが大きいという。これまでの水の流れに人の手が加わったため谷水、湧水の枯渇や減少が起こったのである。また、琵琶湖の水も水質が悪化して飲用ができなくなった。佐吉の生簀は井戸水を汲みあげているが、雨の日は濁るとときく。

菅浦の祭り

永く祭りの伝統が残ってきた菅浦であるが、明治時代に三社が須賀神社として合祀された時は、三社の氏子や菅浦を分けてきた西村、東村のしきたりなど様々に難しい課題があったという。祭りなど集落の年中行事は、「氏子総代」三人と「神主組」と呼ぶ西、東組の九名が一年交代の当番制で執り行われている。また当年の神主組は、元、中、末に分かれ四か月ごとに交代する。大正時代までは、本役である神主組は、経済的に余裕のある金持ちの中から選ばれていたそうで、この役になりたいと皆頑張ったという。

例年、四月第一土曜日、日曜日に行われる「昔のまつり」は、五穀豊穡と人々の安全祈願として行われているが、そこには独特な慣わしを見ることができる。「幣祭（ヘマツリ）」と呼ばれ、

地を掃く「幣回し」や「幣倒し（ヘタオシ）」などの所作がある。神輿の担ぎ手は、「アシナカ」という草履をはく。担いで走るため踵を地に付けないから草履の後ろは不要ということである。アシナカ（足半）は、鎌倉時代の絵巻などに見える軽便な草履として下級の者がはいていたものと同じものと考えていいだろう。

八王子（小林神社）、赤崎、明神（保良神社）の三社の神輿が担がれるが、神輿堂から最初に取り出した神輿のみが、集落の東端となる東の四足門御旅所まで担がれて回る。これをムラマワリと呼ぶ。残りの二基の神輿は集落の中心まで担がれる。このとき神輿が通る道筋には三、四〇センチ間隔で浜の砂利が盛り塩のように積まれる。清めの意味があるという。岩佐氏によれば、浜の砂利は琵琶湖の水で洗われ清められているという考えがあるのだという。



祭りの「ムラマワリ」の神輿。(画像提供・長浜市)



「幣倒し（ヘタオシ）」の所作（画像提供・長浜市）



神輿巡行のために盛られた「石積み」。石垣左側の盛石がそれである（画像提供・長浜市）

年越祭とトシノミ

「トシノミ」とは、オタメ、オウツリなどとも呼ばれ、多くは贈答に対して返礼の品物を指す。あるいは、年の初めに神社から稲穂をいただく農耕儀礼としての「トシノミ」がある。よく似た正月の風習に、歳神様からの配りものとして紙に包んだ米や、餅などをいただくトシダマがある（柳田國男「トビの餅・トビの米」）。

菅浦の「トシノミ」も、年を越すための重要な神社からの配り物で独特の形で年越しと正月の行事となっている。人々は大晦日の「年越祭」に須賀神社に参拝し「トシノミ」をいただく。大晦日に正月の配りものをいただくというのは、私たちからす

れば奇異な感じに映るが、古来一日の始まりは日没からであったことから考えれば、日没から元旦であり、ここにも菅浦の古くから続く慣わしが見受けられる。

菅浦のトシノミは稲穂を数本束にした打ち綱に、浜で拾った小指の先ほどの平たい石をくくりつけたもので、持ち帰り神棚に供えたあと、軒下などにつるして稲穂に残した粃米を鳥に分け与えるという。このトシノミは、神主組が一人一五〇膳計三〇〇本を手作りする。できあがったトシノミは、神主組が琵琶湖で水垢離を行ったのち大晦日に神社に奉納し奉納儀礼の後、参拝の人々に配られる。岩佐氏は昨年この役をされたということであった。

稲穂にくるむものはよく見

受ける「モチ」でなく、小さな「平石」で、ここでも琵琶湖の水で常に洗われ浄化されたものが用いられている。そもそもなぜ小石なのか、民俗学者井上頼壽氏（いのうえよりひさ）は菅浦の「トシノミ」について「トシノミとは、稲の根元に小石を付けたもので、石は土の表徴である。即稲草が土に生えている形を現

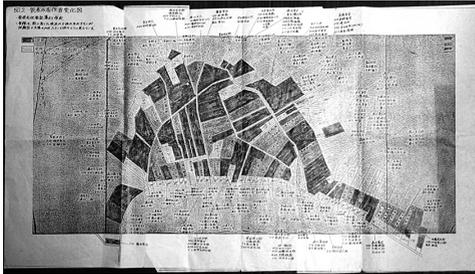


「年越祭」で配られる「トシノミ」。手に持っているのがそれである（画像提供・長浜市）

したものである。「〔続近江祭礼風土記(農耕儀礼「トシノミ」)〕との見解を示されている。「土の表徴」とは農地の少ない菅浦であればこそかもしれないが、少しは琵琶湖と結び付けてみたい。古来、菅浦の人々は漁師として船を操り船とともに生きてきた。琵琶湖の漁師は小石を舟霊の依代とみて大切に扱ってきたという。その舟霊信仰との関わりが小石を包み奉納する形となったのではないだろうか。いずれにしろ、琵琶湖を中心に水、土、稲、鳥など人々を包む自然との関わりが、年中行事の形として取り込まれているといえる。

家がえ(家移り)

住まいについて、下世話ではあるが山の手というほうが高級感があるように聞こえる。菅浦では逆に、地価は琵琶湖に面した「浜出」のほうが高く、山側の「北出」が低いとされてきた。琵琶湖の影響をまともに受ける浜出は、財力がないと石垣などの整備ができない。また船着き場、飲み水をはじめとする水利用などから浜出のほうが上位になっ



「家がえ」を記録した図面。1軒で4~5人の入れ替わりがある(阿弥陀寺所蔵)

ていた。そのため浜出の家で生活が難しい家がでると、財力を蓄えた北出の家と「家がえ(家移り)」を行っていた。石垣をはじめとする水との関係、浜の重要性は家を越えて共同体として最優先であったことが、家がえ制度に発展させたのではないだろうか。阿弥陀寺が所蔵されている集落の地図を見ると、同じ家屋に幾度も名が書き加えられて家がえの頻度がよくわかる。

村の要、惣寺としての阿弥陀寺

菅浦の祭・宗教行事を語るのに須賀神社があげられるが、寺としては阿弥陀寺を除くことができない。一つの村としての菅浦だが、「西村」・「東村」の二つの「惣庄」として菅浦を形成してきた。現在は真藏院、安相寺、祇樹院を合わせて四寺しか残っていないが、かつては土地柄広い堂を持っていないことから、村内には支度僧(しどそう)による氏寺を含め十二カ寺もの小さな寺があったという。その十二カ寺の中で、「惣寺」の「浄光山等覚院阿弥陀寺(一三五三年託何上人(たくかしょうにん)により開基)」は「道場」として村のかなめの役割を担ってきた。



「惣寺の阿弥陀寺」。時宗。ながらく村の寄合の場所でもあった

明治の学制までは寺子屋の役割を果たし、「惣の寄り合い場」としては昭和五十二年（一九七七）に建設された菅浦公民館にその役割を移すまで続いてきた。阿弥陀寺には惣の記録「阿弥陀寺古文書」が永らく保管されてきた。「開けずの箱」に保存されていた古文書五八冊と古絵図一幅で、国の重要文化財に指定されている。秋山住職によると、明治時代に合祀された須賀神社の格上げ嘆願に関わり淳仁天皇関係文書として持ち出され、昭和二六年ころ菅浦に戻されたという。現在は滋賀大学に寄託されている。

あとがき

成安造形大学附属近江学研究所発行『文化誌近江学』第一〇号に「菅浦 湖と生きる村を訪ねて」と題して書いたのだが、紙面の都合から一部項目や文章の割愛をせざるを得なかった。聞き取り調査をさせていただいた方々の話は多岐にわたり、村に生きる誇りと多くの方に村の歴史や生活を知っていただきたいという思いが強く感じられた。筆者としても少しでも省いた内容が追加できないかとの思いから、ここに改めて推敲し構成や言葉足らずになっている箇所を補足し書き直してみた。

本文中には載せなかったが、船でしか行けなかった陸の孤島ととらえていた菅浦であるが、聞き取りを行っているなかで、昔から山の道があったことが判った。集落の北の尾根を越えて

大浦までの道があったさうである。年配の藤井氏は山の道を通り小学校に通っていたということであった。調査が十分でなかった船路、陸路といった「ミチ（路）」をとらえてあらためて菅浦を探ってみたくなった。

最後にご協力いただいた菅浦郷土史料館の藤井泉三氏、阿弥陀寺住職秋山富男氏、割烹旅館佐吉の岩佐達己氏に紙面を借りてお礼を申し上げる。

参考

菅浦…滋賀県長浜市西浅井町菅浦 交通手段 JR湖西線水原駅より近江鉄道バス

淳仁天皇…天平宝字八年（七六四）藤原仲麻呂の乱で廢帝となり、淡路に流され翌年の天平神護元年（七六五）にその地で亡くなったと「続日本紀」に記す。菅浦では、淡路は淡海の間違いで、須賀神社の船形古墳が淳仁天皇の御陵と伝わる。

阿弥陀寺…木造本尊阿弥陀如来立像は鎌倉時代文暦二年（一二三五）の作、快慶の弟子行快の銘がある。秘仏。重要文化財。聖観音坐像、阿弥陀如来坐像いずれも平安時代後期の作、長浜市指定文化財。

ヤンマー家庭工場…創業者山岡孫吉氏により、滋賀県北部に数多くの農村工場が設置された。作業所は個人の敷地に建てられ、主婦層を中心に部品粗加工を行い副収入と生活改善に影響を与えた。昭和時代の菅浦を支え現在も十戸ほど稼働している。（岩佐氏談）

近江輿地志略…享保十九（一七三四）膳所藩士寒川辰清による近江の地誌をまとめた書籍、全一〇一巻一〇〇冊、近江学の出発点となる地誌。

参考文献

- ・滋賀県長浜市教育委員会 『菅浦の湖岸集落景観保存活用報告書』
二〇一四年
- ・滋賀県琵琶湖環境部 『琵琶湖ハンドブック改訂版』 二〇一二年
- ・滋賀県 『琵琶湖と暮らし』二〇一五指標でみる過去と現在』 二〇一五年
- ・柳田國男 『食物と心臓』 講談社 一九七七年
- ・富山和子 『水の文化史』 文芸春秋 一九九〇年
- ・寒川辰清編 小島捨市校注 『近江輿地志略』 歴史図書 一九六八年
- ・橋本鉄男 『日本の民俗 滋賀』 第一法規出版 一九七二年
- ・井上頼壽 『続 近江祭礼風土記(農耕儀礼)』 滋賀県神社庁 一九七三年
- ・畑中誠治他 『滋賀県の歴史』 山川出版 一九九七年

里山の民間信仰―仰木の地蔵信仰について―

加藤
賢治

Name :

KATO Kenji

Title :

The Folk Religion of Satoyama: A study of Religious Beliefs surrounding Jizo Statues in Ogi

Summary :

Ogi, a town at the foot of Mt. Heiei's Enryakuji Temple, is known for its numerous stone Jizo statues. Here I will offer an analysis of the religious beliefs observed in Satoyama by examining the way in which such beliefs and daily life are intertwined with Mt. Hiei.

第一章

(一) 仰木集落の概略

大津市北部、比叡山延暦寺三塔十六谷の最北部に位置する修行道場横川の麓に「仰木」という集落がある。その集落の名は、横川の霊木を仰ぎ見ること由来しているという。すなわち、仰木という集落は、平安時代末期から中世末期に至るまで比叡山延暦寺の荘園として延暦寺と深い関係を築きながら発展してきた。また、仰木の庄の鎮守社である小椋神社（旧称・田所神社）は、『延喜式神名帳』に記載される滋賀郡八座の一つであり、『日本三代実録』貞観五年（八六三）十二月三日条によると、従五位下に叙され、古くから朝廷とも深く繋がっていたと考えられる。（写真1）

仰木の開創については、近世後期に写された『江州高日山由来』によると、広大な山野であった仰木はかつて上野山とよばれ、上野山宗治郎という老翁（日吉大宮権現）が斧を持って切り開いて土地を開発し、奥山に入った時に賀太夫（伽太夫）という仰木の地主神と出会った。ここでは、仰木は最初に下北坂本（下仰木）から開発が始まり、次に上北坂本（上仰木）、上

社を中心に上仰木、辻ヶ下、平尾、下仰木の四つの字に分かれ、静かに平生の暮らしが営まれている〔註2〕。

戦後の高度経済成長による変化も、この仰木では緩やかに進み、四つの集落では、傾斜がある棚田での米づくりを中心に、神仏をもとにした年中行事が日常的に行われてきた。

以後、農業の機械化を進め、生産力の向上を目指して棚田の土地整備事業が進められ、近世以降、傾斜地に伸びていた小さなぐにやぐにやした田圃の畔(あぜ)は、直線に整備され、農機具が動きやすく効率の良い長方形の田圃に改良されていった〔註3〕。

その整備の際、土を掘り返すと多くの石仏が掘り起こされ、畝の袂に安置された。おそらく、近世につくられた石仏が水害などで、土中に埋もれていたものと思われる。ひと所に数十体の石仏が集まる石仏群が、至る所に存在する。

ただ、注目すべきことは、掘り起こされた大量の石仏だけでなく、この地域には非常に多くの石仏が存在し、その一体一体には朝夕に生花が生けられ、浄水が供えられている。この石仏、

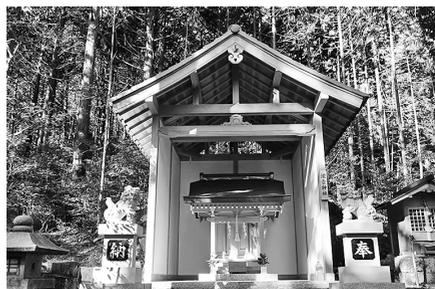


写真3: 式典に合わせて祠や周辺の整備を終えた現在の滝壺神社本殿

いわゆる仏様は一体何者なのであろうか。この地に暮らす人々は、一様に「お地藏さん」と呼んでいる。一般的に見ても西日本では石仏自体を総称して「お地藏さん」と認識しているところがあるが、実際には、阿弥陀仏や道祖神、庚申さん、そして地藏さん、もちろん多くは風雨にさらされ磨耗が激しく姿がわからなくなっているものもある。(写真4)

このような仰木集落におけるお地藏さん(石仏)に対する信仰は、どのように浸透したのであろうか。その必然性について、次章で検証してみたい。

第二章 仰木における地藏信仰

(一) 源信と『往生要集』

地藏信仰とは、地獄と極楽に関わる浄土思想と深いつながりがある。その浄土思想が醸成されたのが仰木の地名の由来となった比叡山の北方「横川」の地である。横川は最澄の後に継いだ慈覚大師円仁(七九四〜八六四)が開いた修行道場で、延



写真4: 恵心僧都源信自作と伝わる六体地藏が安置される地藏堂(上仰木墓地)

曆寺中興の祖といわれる慈恵大師良源（元三大師）（九一二～九八五）によって四季講堂（元三大師堂）を中心に、一大修行道場として発展した。

そして、その横川で浄土思想をまとめ、わかりやすく日本全土に発信したのが、良源の高弟の一人である恵心僧都源信（九四二～一〇一七）である。源信は、寛和元年（九八五）、横川の恵心堂で『往生要集』を執筆し、浄土関係の仏説や諸論、經典から、地獄や極楽浄土に関する記事を拾い集め、「厭離穢土」「欣求浄土」^{註4}を訴えた。全一〇章の中でも、第一章「厭離穢土」に語られた「六道（地獄・餓鬼・畜生・阿修羅・人間・天）」という魂が転生するという六つの世界の解説に重きが置かれ、特に「地獄」の記述において、源信は全身全霊を注いだと思われる。

源信は、伝統的保守的仏教の教義書として知られる『俱舍論』^{くしやろん}に従って、等活、黒繩、衆合、叫喚、大叫喚、焦熱、大焦熱、阿鼻の八大地獄から書き始め、凄惨なる地獄の恐ろしさを文字で表現した。源信が描いた恐ろしい地獄絵巻は、鎌倉時代以降、文字通り「六道絵」や「地獄絵」などの絵画として描かれるようになり、文字を読むことができない一般庶民にまでその恐ろしさが広まっていくのである。

その一方で『往生要集』には、このような地獄の恐ろしさだけでなく、どうすれば地獄でなく、極楽へ行けるのかという方便も書かれている。すなわち、阿弥陀仏の世界である極楽浄土

の素晴らしさを紹介しながら、具体的には、南無阿弥陀仏という念仏を唱えることや阿弥陀仏を観想することなどが説かれ、極楽へ行くための方法が様々に語られるのである。

（二）『往生要集』に登場する地蔵菩薩

その方便の中に、地蔵菩薩が登場する。『往生要集』「第二欣求浄土」の「七・聖衆俱会の楽」の中で源信は、地蔵菩薩が地獄での苦しみを抜く「地獄抜苦」を「十輪経」から引用して紹介している。横川における源信やその師良源の時代は、上級貴族社会の元にこの信仰が広がり、『左経記』^{註5}の記録から、良源が始めた地蔵講が横川を中心として行われていたことがわかる。ただし、この時代は、阿弥陀如来と共に、観音菩薩や勢至菩薩らと並んで地蔵菩薩が存在し、地蔵菩薩が独立した形で信仰されていたわけではない。

速水侑氏の論考「日本古代貴族社会における地蔵信仰の展開」によると、

「院政期に入り、天台教団の頽廃が顕著となるにつれ、源信の法流に連なる横川浄土教家（地蔵説話に現れる僧侶等）達は、山を離れ、別所に隠棲し、あるいは京洛に出て布教し、貴賤の帰依を集めた。横川浄土教の地蔵信仰は、地蔵説話と横川浄土教家の関係から推察される如く、おそらくは彼等によって、地蔵講・地蔵会等を通じて、民衆の間に広まったのであり、院政期の民間地蔵信仰は、一面において、貴族社会地蔵信仰（こと

に横川地藏信仰)の民間下降として理解することができるのである」と述べ、良源や源信が亡くなった後、横川の宗教活動が世俗化し、浄土の教えを訴える僧侶たちが、山を降りて喜捨を募って活発化したというのである。

そして注目すべきは、山の上である横川にあった地藏信仰は、あくまでも上級貴族に支えられ、阿弥陀仏に従属した形であったのに対し、山を降りて、民間に浸透した地藏信仰は、阿弥陀仏から完全に独立したものである。

速水氏は、論考の中で当時の仏教説話集の代表とも言える『今昔物語集』に、地獄蘇生譚、すなわち地獄に落ちた人たちが、何らかの事情(經典の写経や、仏に祈るなどの作善行為)によって罪を許され、世に蘇生するという説話の中で、特に地藏菩薩が登場する説話が極端に多いと指摘している。

(三) 地藏菩薩が登場する仏教説話

それでは、どのような説話が『今昔物語集』で語られたのだろうか。特に興味深いものを紹介してみる。

『今昔物語集』巻第十七「三井寺浄照依地藏助得活語第十九」に、三井寺の浄照という僧侶の蘇生譚がある。浄照が、十二、三歳ばかりの頃、他の子供と遊んでいた時に、戯れに自分の手で地藏菩薩を彫って、遊びで花を供えたり、僧侶の真似をして供養するようなことをしていた。その仏像は、いつしか忘れ去られ、堂の隅に置き去りになったまま、やがて浄照は出

家していつしか尊い僧侶となった。しかし、三十歳を過ぎた時、病にかかって死んでしまった。

すると恐ろしい地獄の使者が迎えに来て、地獄に連れて行く。地獄では多くの罪人が泣き叫びながら激しい苦しみを受けている。この地獄から抜け出したいと願った時、小さな僧が現れ、自分は、かつて浄照がつくった地藏菩薩であるという。あくまでも浄照が戯れにつくったものであるが、そのことによって地藏菩薩と浄照に縁が結ばれ、生前からずっと守ってきたのだという。ちょっとした隙に、地獄に落ちてしまったようだからと言って、閻魔王の前に行き、浄照の罪を許してもらえよう訴えた。浄照は涙を流して喜んだ途端、蘇生したという。その後、地藏菩薩を厚く信仰し、高僧となって生涯を全うしたという。

もう一つは、『今昔物語集』巻第十七「聊敬地藏菩薩得活人語第二十四」である。主人公は清和源氏の祖で勇猛な武将として知られる源満仲の郎等(家来)である。この郎等は、猛々しい気性の男で、生き物を殺すことを日常の生業として、善根をすることも全くなかった。ある時、広い野原で鹿狩りの途中、一頭の鹿を追いかけて馬を走らせていた。ある寺の前を通過した時、馬を走らせながら一瞬寺の中を覗くと、お堂の中に地藏菩薩の像が立っていた。郎等はこれを見て、ほんのちよつと敬い心を起こし、左の手で笠を脱いで、それだけでその場を駆け去った。

その後、郎等は病にかかり、ついには死んでしまった。ふと

気づくと閻魔大王の前において、自分の罪状が述べられている。周りには、極悪人たちが獄卒の激しい責めを受けている。その恐ろしい光景を眺めながら郎等はなんとか救われる方法はないのかと嘆いていた。するとその前に小僧が現れた。その小僧が言うには、自分は郎等が一瞬敬い心を起こして笠をとって見た地藏菩薩であるという。あなたは極めて重い罪を背負っているが、一瞬であつても私を敬う心を持ったので、是非ともこの地獄から助けたいと思うという。

郎等はあるがたく思い、必死でこの小僧を拝んだ瞬間、蘇生した。郎等は妻にこの話をして心を入れ替え、以後一切の殺生をやめ、地藏菩薩はかりそめにも敬う心を持った人ですら救ってくださるのだから、ましてや心を込めて長年祈念し続けられ、必ず救ってくださること間違いない。人々はこの話を聞いて、専心に地藏菩薩にお仕えすべきであると、語り継がれるようになったという。

(四) 民間に広まる地藏信仰

源信の『往生要集』に曰くは、日常的に阿弥陀仏を熱心に拜んでいるものは、死後六道輪廻転生から逃れ、極楽浄土へ生まれ変わることができるのである。しかし、地藏菩薩に関するこれらの説話は、本来、日常的に神仏を厚く信仰していた善人が、救われていくのではなく、それができずに地獄に落ちてしまった罪人を地藏菩薩が救う話である。それも興味深いのは、生前、

一生懸命地藏菩薩を信仰していたのではなく、ほんの一瞬、地藏菩薩を拝んだ、あるいは、戯れに地藏菩薩を彫ったなど、ちよつとした縁によつて地獄から救われるのである。

例えば上級貴族は、日常的に作善が行えるが、庶民は、生まれてそれまでの年月に仏教に触れることができず、既に殺生など仏門にあつてはならないことをしてしまつている前提がある。この庶民の心を救うには、地獄に一旦落ちてでも救つてくれる地藏菩薩を独立させて信仰する必然性があつたということができ

る。

中世初期にはこのような仏教説話が、横川から降りてきた浄土教家である僧侶たちによつて語られ、既に殺生をしている罪悪人の心を救い、作善に向かわせることをしながら、僧侶は信仰を広め生業を続けたと想像できるのである。

先述の通り、仰木集落は、浄土教が発祥した横川の麓にある。全国に先駆けて地藏信仰が民衆に降りてきた場所であることに間違いない。おそらく早くから、仰木集落に地藏講や地藏会などが行われたであろう。そしてそれに伴つて石仏も誕生していったと考えるのも不思議ではない。(写真5-11～5-13)

次章では、現在仰木の石仏に注目している人々や、今も仰木に暮らす人々がどのように地藏菩薩と触れ合っているのかを検証してみたいと思う。



写真5-2：辻ヶ下真迎寺飛地境内地藏堂 国重要文化財木造地藏菩薩立像が安置されている。撮影：大原歩



写真5-1：辻ヶ下真迎寺飛地境内地藏堂 撮影：大原歩



写真5-3：地藏堂では今もなお地藏講に関連する行事が行なわれている 撮影：大原歩

第三章 仰木に見られる民間信仰のかたち

(一) 地藏プロジェクトの取り組み

この仰木の地に多数点在する「お地藏さん」と呼ばれる石仏群に注目した人たちがいる。平成十二年(二〇〇〇)に、「地藏プロジェクト」と名付けられたプロジェクトチームが発足した。メンバーは、当時の成安造形大学の教職員と学生や卒業生などで構成され、石仏群が散在する仰木地区と、隣接する新興住宅街の「仰木の里」も含めた地域を調査することから活動は始まった。

プロジェクト発足のきっかけは、当時から、この仰木地区にアトリエを持ち、人と自然が共生する空間が「里山」であると定義づけ、仰木の「里山」を、作品を通して世界に発信した写真家の今森光彦氏(現在成安造形大学客員教授)の気づきによる。今森氏は、この里山をフィールドに写真作品を撮影する中で、被写体の一つである石仏に興味を持たれていたところ、当時の成安造形大学の教員と、集落のどこにどのくらいの石仏があるのかを調べてみようということになったという。(写真6)

現在、地藏プロジェクトの代表を務めるのは、谷本研氏(成安造形大学助教)。谷本氏が地藏プロジェクトに合流したのは発足から二年後の平成十四年(二〇〇二)で、すでにひと通りの調査が終了していたが、その石仏調査の結果を、どのように整理してまとめ、広く世の中に発信するのかというところのお

手伝いから関わり始めた。

はじめは、「ものづくりの立場で、何ができるだろう」と悩んだが、仰木というフィールドに入り、みんなで話し合いながら意見を出し合った。

この年に、「お地藏さん」と呼ばれる多くの石仏を、老若男女を問わず、幅広い世代の人々に興味を持ってもらうため、硬い論文や報告書ではなく、石仏の写真等がカードとマップとしてまとめられた。「地藏Cards」と名付けられたカードは、トランプゲームのカードになぞらえて、四種（上仰木♠、辻ケ下♦、平尾♣、下仰木♥）に分けられ、無数に点在する石仏から各地域十三ヶ所ずつを厳選し、合計五十二枚にまとめられた。当初、カードは地域の地藏盆でふるまわれるお下がりのお菓子に潜ませて配布されたり、マップと全種類のカードをセットにし、地藏盆におけるビンゴゲームなどの景品として地域住民の手に渡った。各カードの表は、名前が付けられた石仏（お地藏さん）の写真であり、裏面はマップの位置と対象となる石仏に関するエピソードが紹介されている。（写真7-1〜7-3）

同時に仰木の立体地図の制作が始まり、また、天社門と辻ケ下地区の夏の地藏盆行事に参加して、地域の人々とともに手作りのランタンによる灯りの演出。平成十五年（二〇〇三）、圍場整備されたかつての棚田における、インドネシアの伝統打楽器「ガムラン」と地域の小学生たち



写真7-2：辻ケ下の地藏堂でお下がりのお菓子に地藏カードを入れている様子 提供：地藏プロジェクト



写真6：仰木集落内で地藏プロジェクトが聞き取り調査をしている様子 提供：地藏プロジェクト



写真7-3：地藏カード 提供：地藏プロジェクト

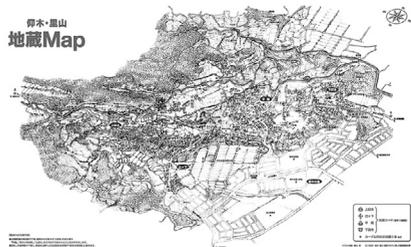


写真7-1：地藏Map 提供：地藏プロジェクト

による仰木太鼓とのセッション・コンサートの開催。平成十七年（二〇〇五）、辻のお大師さんで知られる辻ヶ下の真迎寺での元三大師の誕生会に合わせた「豆大師」にちなんだプラ板づくりワークショップの開催。そして、平成二十年（二〇〇八）十月には、地域の氏神である小椋神社の境内において「仰木一〇〇〇年のくらし博覧会」を開催した。

地蔵プロジェクトは、地蔵をきっかけとして、仰木集落の自然環境や歴史、文化、信仰、そして人々の暮らしに関わりながら、地域の人々を巻き込み様々なイベントを企画してきた。

現在も地蔵プロジェクトの中核を担って活動する谷本氏は、仰木の石仏や、そこに暮らす人々と接する中で、多くの魅力を感じてきたという。

棚田の風景の中で、自然と共に暮らす人々は、仏教や神道という宗派や教義などの形式にこだわらない包容力があり、常に神仏に祈りを込め、そのご加護としての自然の恵みに感謝している。この空間に生かされていることに畏敬の念を持って日常生活を過ごすという生活スタイルは、谷本氏たち地蔵プロジェクトのメンバーにとって新鮮にうつったのである。

辻ヶ下の地蔵盆の行事に参加した時は、地蔵盆は単なるイベントじゃないと教えられた。地蔵堂に祀られるお地蔵さんの前に皆が集まる。賑やかに楽しんで構わないが、年に一度のご開帳であるお地蔵さんの前であることを忘れてはいけない。そ

の年に生まれた子ども（赤ちゃん）の写真を展示するスペースも用意されており、谷本氏自身の子供も誕生した年に紹介してもらったことがある。お盆行事の終了後に「盆たたき」といういわゆる「直会（なおりい）」に入れてもらい、自治会の役員さんたちと交流する中で、集落の深いコミュニティの存在も知った。（写真8）

集落や田畑の畔（あぜ）に点在する石仏に感謝しながら暮らす仰木という地域に入らせていただくことで、いわゆる都市生活の中では感じることでできない日本文化の精神性のようなものを肌で感じていると谷本氏は語ってくれた。

（二）中井家の信仰

仰木の四箇村（上仰木、辻ヶ下、平尾、下仰木）には、かつて比叡山中や小椋神社の神宮寺に存在した木造の仏様が、集落内の寺院の飛地境内にあるお堂に安置されている。中でも辻ヶ下集落では、平安後期の作風を残した鎌倉前期に制作されたという木造地蔵菩薩立像（国重要文化財）が真迎寺の飛地境内の



写真8：辻ヶ下の地蔵盆で地蔵プロジェクトが担当したビンゴゲームの様子 提供：地蔵プロジェクト

地藏堂に安置されている。その地藏さまを地域の人々とともに
お守りされている中井徹さんという方がおられ、この地におけ
る信仰についてお話を聞いた。

中井さんは昭和十八年（一九四三）に仰木生まれ。高校卒業
後、大手音響機器メーカーに就職され、神奈川県横浜市へ。昭
和四十二年に京都支店に転勤を申し入れ、実家に戻り、昭和
四十六年、二十八歳の時に結婚、三児の父となる。

昭和五十一年九月に、食道に腫瘍が発見され、十月に手術は成
功し、無事摘出。昭和六十一年に再び神奈川県へ転勤。家族で
横浜に居住。平成十年に会社を五十五歳で早期退職。仰木に
帰ってくる。

退職後は、平成十一年に仰木小椋神社氏子総代年番取締り、
平成十四年から二十二年まで上仰木土地改良区事務局長、その
後、森林組合事務局長、真迎寺檀家総代、仰木地区活性化委員
会事務局長など仰木集落において、様々な取り組みをされ、現
在に至る。七十四歳。

激動の人生の中、中井さんは、仰木の風習や信仰に学ぶとこ
ろが非常に多くあったという。幼少期の思い出に、近隣で大峰
修験の山伏の方がおられ、その熱心な信仰の姿を不思議に思い
ながらも、いつも自然物や神仏に祈りを捧げる暮らしを眺めて
いた。

また、この中井家は、親村（しんむら）と呼ばれる宮座の座
衆の一員であり、小椋神社に関係する様々な儀礼祭式に関わる。

そこには、儀礼を執り行う長老^{註6}がおられ、その長老の威
厳は大きく、集落のしきたりや、生活の知恵などを日常的に教
えていただいた。時には厳しく叱られることもあり、良い意味
で怖い存在でもあった。

他に、中井家は複数の「講」に所属している。「愛宕講」「葉
師講」「行者講」「大師講」「山の神講」「地藏講」などがあり、
各講の講員数は、数人から十数人とまちまちで、講員の顔ぶれ
は、講によって異なる。講は毎月行われるもの、年に数回行わ
れるものなどがあり、講の内容は、概ね、当番の家に集まって
講に関する掛け軸を掲げ、経文を唱え、会食するという形式が
多い。

中でも、「地藏講」は、国重要文化財の木造地藏菩薩立像を
お守りする最も重要な役割があり、かつては中井家を含む四家
が担ってきた。現在は、中井家のみが地藏堂のお世話を引き継
いでいる。現在、地藏堂の地藏菩薩に関連する行事は、辻ヶ下
自治会員と真迎寺の檀家衆^{註7}の年中行事として、一月二十
三日の地藏汁講（新年会）、八月二十三日に近い土日に行われ
る地藏講（地藏盆）、十一月十四日の十夜念仏（数珠練り）が
行なわれている。（写真9・10）

このように見ると、中井家は、集落の中で様々なコミュニ
ティーに所属し、多くの人とつながり、その中心には神仏が存
在する。中井さんはこのような地域社会で成長し、多くのこと
を学んだのだと語る。



写真10：四名の地蔵講の講員の名前が記される木箱の蓋

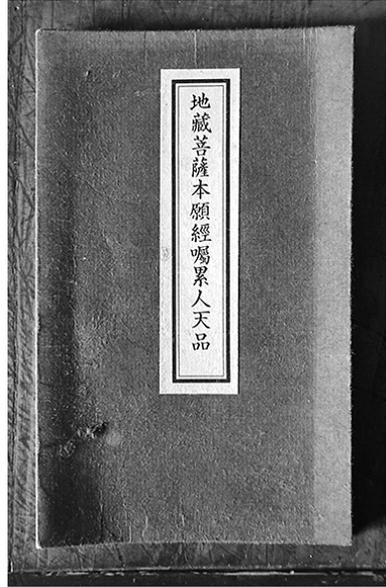


写真9：中井家にある地蔵菩薩関連のお経 日常的に地蔵菩薩に唱える経本

関東で、大企業の社長室直属の機器の買い付けを担当した時は、多くの他社の役職者と会い、様々な交渉ごとを行うのであるが、少年期に家に出入りする長老や講員の人たちとのコミュニケーションがいろいろな意味で役に立ったという。目上の人から多くの話を聞いて、それを大切に思っ、自分の力にしていこうという「人間信仰」のようなものは、仰木辻ヶ下集落で長老らに採まれて育まれたと熱く語られた。

そして、中井さんの前半の人生で最も大きな出来事であった、大手術の時は、必死で神仏に祈ったという。比叡山横川の元三大師堂に何度も登り、不動明王や厄除けの角大師にお参りし、東大阪の石切不動でお百度詣りもした。そして、お守りをしていける地蔵堂のお地藏さん、家の庭に佇むお地藏さん（複数の石仏）に毎日祈った。科学の力でもどうしようもないこと。三人の小さな子供を残して倒れるわけにいかない。熱心に祈った。その結果として、京都大学医学部の名医との出会いがあり、その方のおかげで綺麗に腫瘍は取り除かれ、今があるとのこと。（写真11）

最終的には、科学（医学）



写真11：中井家の庭に安置されるお地藏さん（石仏）

の力が生命を救ったのかもしれないが、腫瘍が発見された時、傍にお地藏さんがいなかったら、間違ひなく心が折れていたという。お地藏さんがおられなかったら、精神的に自分も、妻も持たなかったと中井さんは語ってくれた。

まとめ

仰木集落は、日本浄土信仰の発祥の地横川の麓に位置し、山上の僧侶の修行を支え、仏門に帰依しながら比叡山と深い関係をつないできた。

今回の論考では、その仰木に多く見られる石仏と地藏菩薩についての信仰を改めて考えてみた。平安時代後期、横川では、高僧たちが極楽浄土と阿弥陀仏を中心とする信仰を発信し、京の都の貴族たちに受け入れられ、鎌倉時代以降、阿弥陀仏や周辺の諸菩薩から地藏菩薩が独立して民衆に支持されるようになる流れが見えてきた。地獄の苦しみを抜く（地獄抜苦）という地藏菩薩の役割が、無知なる故に作善を行うことができず、地獄へ落ちることが前提である庶民に積極的に受け入れられたと考えられるのである。

そして、今もなおその地藏菩薩（石仏）が人々の心を救う役割を担っていることが、聞き取りによって明らかになった。

地藏菩薩の役割は地獄抜苦である。地獄抜苦とは、六道輪廻転生、地獄・餓鬼・畜生・阿修羅・人間・天という六つの世界

を魂が行き来する中で作善を積むが、それがかなわなかった時に地獄に落ちる。一度地獄に落ちれば輪廻転生ができなくなり永久に地獄で苦しみを受けなければならぬとされている。すなわち、地獄に落ちるということは、どうしようもない状況に陥ったことであり、その窮地を救うのが地藏菩薩であるということが言える。

これを人間の知恵により科学が発展した現代に置き換えてみると、科学の力でも解決できないことを地藏菩薩（石仏）が一旦預かってくださるのではないだろうか。様々なデータを駆使しても未来を確実に予測することは不可能である。病を患った時、現代の発達した医療技術にすべてを委ねるのであるが、それが完治するかどうかということについては、誰にもわからない。地藏菩薩に祈ることで、病気が治るわけではないが、祈る行為や、石仏としていつも見守ってくださっているということが、心に少しの安らぎを与えてくれるのである。予測不可能な未来に対する不安という苦しみを抜苦してくれるのが現代の地藏菩薩である。

今回、仰木という比叡山の麓の集落を眺めながら、そこに息づく信仰を見てきたが、他にも里山の集落には、このようないわゆる民間信仰が、講や祭礼などともに多く伝わっている。一方で神も仏も存在しない近代社会のイエが存在する。心の孤獨や不安が叫ばれる中で、里山の信仰のかたちに今一度目を向けることも大切であろう。

参考文献

- ・ 藪部寿樹『村落内身分と村落神話』(校倉書房 二〇〇五年)
- ・ 小栗栖健治『宮座祭祀の史的的研究』(岩田書院 二〇〇五年)
- ・ 三浦圭一『中世民衆生活史の研究』(思文閣出版 一九八一年)
- ・ 原田敏明『村の祭と聖なるもの』(中央公論社 一九八〇年)
- ・ 萩原龍夫『神々と村落』(弘文堂 一九七八年)
- ・ 高橋統一『宮座の構造と変化』(未来社 一九七八年)
- ・ 原田敏明『村祭と座』(中央公論社 一九七六年)
- ・ 肥後和男『近江に於ける宮座の研究』(臨川書店 一九七三年)
- ・ 肥後和男『宮座の研究』(弘文堂書房 一九四三年)
- ・ 田中久夫『地蔵信仰と民俗』(岩田書院 一九九五年)
- ・ 速水侑『源信』(吉川弘文館 一九八八年)
- ・ 速水侑『日本古代貴族社会における地蔵信仰の展開』(北海道大学文学部紀要 一九六九年)
- ・ 眞鍋廣濟『地蔵菩薩の研究』(三密堂書店 昭和一九六〇年)
- ・ 『日本古典文学全集 今昔物語集 二』(小学館 一九七二年)
- ・ 加藤賢治『村座と祭祀滋賀県大津市仰木地区の例』(近江地方史研究第四四号 二〇一〇年)
- ・ 加藤賢治『古式祭祀に見るコミュニティとそこに展開する

コミュニティション大津市今堅田一丁目目の愛宕講と地蔵講を中心にして(成安造形大学附属近江学研究所紀要3号 二〇一四年)

註

- 1、仰木集落内の比叡山の莊園鎮守社であった小椋神社の名残を留める荘宮座の一つ。上仰木と辻ヶ下の一部に居住する人々が構成員となっている。
- 2、二〇一八年一月現在の行政区画では、大津市仰木一丁目から七丁目にあたり、世帯数八二三戸、二二三人が暮らす。
- 3、平尾地区の大倉川水系の棚田は、その土地改良が行われなかったため、現在も旧来の棚田の風景を見ることが出来る。
- 4、厭離穢土⇨汚れた世界を厭い離れるべきこと 欣求浄土⇨浄土に生まれることを願うこと
- 5、参議左大弁源経頼の日記
- 6、親村では、オトナ、あるいはオショウと呼ばれ、一つの株に三名のオトナが設定され、真法、浄光、宗徳、浄恵の四つの株が存在する。合計十二人のオトナ衆を十二人衆と呼んでいる。
- 7、辻ヶ下集落では、その地域に七十七軒が居住し、辻ヶ下自治会を運営するとともにほぼ全戸が真迎寺の檀家となっている。

近江の懐ふところをめぐる

石川
亮

近江の懐ふところをめぐる

Name :

ISHIKAWA Ryo

Title :

Omi's "futokoro"

Summary :

Using a survey of an area in Shiga called Shukubamachi I will examine topics such as "techniques" and their "spirit" in order answer the questions, "Why have these particular techniques been preserved and passed down?" and "What special value were they perceived to encompass?" I will also look at why these examples are so limited.

一、おしめし

「懐」とは、衣服に覆われた胸のあたり、その囲まれた空間の意のほか、周りを山などに囲まれた奥深い場所。外界から隔てられた安心できる場所。物の内部、内幕。所持金。胸中、胸の内の考え。など、様々な意味が読み込める。

「近江」は都が造営される以前からいつの時代も歴史の舞台をかたちづくってきた場であり、真ん中に大湖を携え周囲を街道が行き交う交通の要衝である。まさに「日本の懐」と呼ぶにふさわしい場所と言えよう。

このような場で絶えず次の時代を予測し、新たな考えやアイデアを生み出し、受け入れ、イノベーションを起こす一方で、伝統や独自性を重んじ日々工夫し知恵を出し合う。その精神が今日まで受け継がれ持続してきた場に他ならない。そこに現れる一つひとつを取り出していきたい。

「近江の懐」探しは以前から手をつけたかった仕事のひとつである。これまで「近江の水」を巡り今日も持続しているのだが、命の水の周辺には必ずと言って良い近江の暮らしの中から

石川 亮

息づく生業がある。そこにはクオリティの高い手技やそれをかたちづくる精神が脇を固め、その生業を成立させている様に思う。水を巡りながら横目にそれらを見付け、「いつかは追求してみたい!」という思いを抱いていた。また2013年から2016年にかけて滋賀県のブランディングに携わるお手伝いから、自らその潜在能力を掘り起こす事業に携わる機会が与えられた。その結果は一言で言うなら「恐るべし近江の潜在能力!」というのが妥当であろう。こちらから探さずとも街道沿い、宿場を軸に進むと自ら迫って来るかのようなのである。私はその迫って来る「何か」の周辺でそれを引き立て、支え、受継ぐ脇役に迫りたい。それらは決して脇役ではないがその懐近くで支える「クオリティの高い手技や精神」に焦点をあてたい。

二、大津の茶櫃(ちやび)

札の辻(京町一丁目交差点)から京町通(旧東海道)を東京方面へ、大津駅前大通りを過ぎ少し進んだ琵琶湖側に近江茶で商いを営む中川誠盛堂がある。安政五年創業の老舗だ。軒上には一枚木に「茶」と彫込んだ看板が掲げてある。私は以前大津市の景観重要広告物の審査に携わった事を思い出した。大津百町、東海道沿いに今日も受継ぐのれんや軒先看板を、広告物の観点から伝統的な古都大津に相応しい景観形成の一部として位置付け、大津の景観を見つめていく事業である。中川誠盛堂の

看板は選定は受けなかったが景観形成に重要な役を担っていることは間違いない。今回はそのひさし看板の下の「みせ」に展示してある壺に目が止った。店内に入ると次に売り場の後側の棚にも目が行く。店内は様々な種の茶が丁寧に小分けされ並んでいる。産地や銘柄がわかりやすく表示され見ているだけで嬉しい気持ちになってくる。そこで「どうぞ!」と店主の中川武(なががわたけし)さんに声をかけていただいた。その時私はちょうど「政所」の茶を手にしていたことも重なり、幻の銘茶である政所茶をそっといれてくださった。また話は遡るが以前、君ヶ畑の木地師を訪ねた時、お話されながらゆっくりと煎茶をいれてくださった時の事を思い出した。急須に冷ました湯をいれて少し時間が経ってから茶が注がれた。口にすると最初は軽やかでほんのり甘く感じた。その後すっきりとした渋みが口の中に伝わり煎茶では感じたことのない味わいであった。私は茶に詳しい人間ではないが中川氏のお茶でその記憶を呼び覚まされた。その後も中川氏との対話が続いた。棚に並ぶ黒色の茶缶を見ながら、茶舗の仕事について聞いてみた。イギリスやフランスの紅茶の有名ブランドは様々な国の茶葉を独自の価値観でブレンドする。或いは花、薬草、フレーバーなどをブレンドして様々な楽しみ方を提供している。対して日本茶もブレンドのような仕事茶舗に含まれるのか恐る恐る聞いてみた。すると「私は一切ブレンドしない。現地で作られた茶を出来るだけそのまま出すのが私の仕事だ。」と迷い無く返答された。政

所の茶は一時店頭から消えた事が有るそうだ。以前は三重県からのルートで仕入れていたようで、近年やつとの思いで政所茶の取引を復活させることができたと熱弁された。私は直ぐに「生産量が急激に減る現状、無農薬でつくられる貴重な茶をブレンドする筈が無い」と気付き、何と言う質問をしてみましたのかと恥ずかしくなった。在来樹の政所茶についてはまだまだ話し足りないののでいずれの機会にする。

先程からチラチラ見ている茶缶である。紅茶店にずらりと並び茶缶さながら負けずと劣らず美しい黒い缶、真中に朱色で円が描かれその中に川の文字がデザインされている中に川「中川印」だ。上段に直径三〇cm、高さ四〇cm程度、その上に手のひらで掴むとちょうど良い大きさの蓋がついた茶缶だ。蓋の下部に地名や銘柄が毛筆で丁寧に記載されていた。下段にはそれより大ぶりのものと同じ様に整然と並んでいる。お店では「缶櫃(かんばん)」と呼ばれている。長年使用のためか塗料が剥げ落ちそれが店内に良い雰囲気を出している。更に質問してみると先々の時代から使用されていたようだ。現在は痛みがでて使用されていないが出来れば修理して使用したいとのこと。次に何処でつくられたか聞くと京都の老舗「茶筒の開花堂」製である。明治創業から一貫して手作りで茶筒をつくっており、近年若手六代目が様々な展開で評価されているものの、「茶筒あつての仕事」として初代から手法を守っておられる。次に店頭で見た茶壺はその茶缶になる以前のもので、江戸時代中期頃の信

楽焼である。見るところ灰かぶり自然釉で美しい。当時の店主筆であろうかここにも銘柄を記した札が貼ってある。店の奥の蔵には室町期のものも保管してあるそうだ。

最後にもう一つ。店に伝わる逸話である。江戸時代東海道を参勤交代する侍に対し無礼があった。あわてて茶舗に逃げ込んだ者を当時の女将が木製の箱(茶櫃)に入れて匿った。侍は決死の捜索を行ったが女将は断固として茶櫃を開けさせなかつたそうだ。身分制度の厳しい時代に大津の人は街道を往来する多くの人々を相手にしてきた。日常の暮らしと商いを大切に考える大津の人は、政を司る時の権力者に対しクールな眼差しでみていた様に想像する。それはあたかも大津絵が世相をユーモアで表現する感覚のようにも思える。



お店の雰囲気を出す茶缶



丸の中に川と記された茶缶



今も使われている茶櫃



江戸期の物と伝わる茶壺

大津の茶舗に今も伝わる茶壺、缶櫃、茶櫃を見て受継がれてきた精神や気概を感じた。物欲飽食の時代を経て、社会の変動と並行して日常を保持してきた茶との暮らしがここにある。我々が忘れかけている豊かさをこの茶櫃が伝えていような気がした。

三、海津の木桶

海津は何かとよく訪れる町である。「近江の水をめぐる」(成安造形大学附属近江学研究所紀要第三号「第六号」掲載)でとりあげる事の出来なかった「イケ」と呼ばれる湧水(北と南の二ヶ所ある)。朽ちた杭が残る旧海津港跡、初夏に見られるオ

イサデ漁、ヤナ漁、大崎寺など注目すべきことは数えるときりがない。その一つひとつの暮らしと生業が合わさった姿が「海津・西浜・知内の水辺景観」として重要文化的景観(平成十七年)、日本遺産(平成二十七年)に選定されている。言わば近江における懐そのものと言って良いだろう。

近江今津から湖岸に一番近い道である北国海道(西近江路)を松並木道沿いに北上すると湖に突き出た東山が見える。その麓の町が海津である。いつも立ち寄る鮒寿しの店「魚治」があり、数メートル先には吉田酒造(銘柄・竹生嶋)、その先には角二醬油がある。訪れたのが年の瀬ということもあり、正月の準備が名目で全ての店に立ち寄った。この地は湖魚、米、分水嶺からの一番水の恩恵に預かり、宿場町、港町であることから塩など様々な物資が届いた。この三軒の生業はまさに自然から与えられた恵を伝えていると言えるだろう。そんなことを思いながら決め込んで鮒寿しの店に聞取りを行った。七代目治右衛門の左寄謙祐(さぎけんすけ)さんにお話を伺う事が出来た。以前、「鮒寿しとその環境が教えてくれること」と題して講演会を企画したことがある。その時に鮒鮮(ふなずし)をつける「桶」について、左寄氏は最近その桶を木桶に戻す取組みを行っていると話された。それがきっかけで今回改めて聞き取ることにした。魚治も高度経済成長期の昭和三〇年代からプラスチック製の桶で鮒鮮をつける様になったそうである。それまでは創業の江戸期から木桶でつけていたが先代の時にプラスチック製

の桶に移行しようだ。その理由は桶のメンテナンスが楽なことや発酵が一定であることだそう。時を同じくして生活の主を担っていた様々なスタイルの木桶が姿を消して行った。その主たる要因もメンテナンス問題である。つまり水分を含むことと乾燥を繰り返すと木は徐々に収縮し桶を止めている輪がゆるんでバラバラになる。あるいは桶の口や底の部分が腐って朽ちる。プラスチック製に比べて重いなどである。となるとそれを生業にしていた職人もいなくなりたちまち時代から消え去っていった。

数年前、左寄氏の祖母がご健在の頃、木桶の鮎鮎の味を聞いてみた事があるそう。その事を機にこれまで続いてきた地産地消の味を追求すべく木桶で鮎鮎の発酵にチャレンジする決心をされたそう。祖母の話では鮎鮎し屋の桶は酒屋や醤油屋の「お古」が良いという。その理由は木の中に含まれるレシチンが酒づくりにおいては必要だそうで成分が完全にぬけてしまうと酒屋は桶を取り替える。ここで酒屋と桶屋の関係が成り立っていた。そしてその「お古」を鮎鮎し屋は使用する。鮎鮎は逆に完全に木の成分がぬけ、収縮が安定し、更に酒屋のそれと比べて一回り小さいものが必要とのことだ。酒屋が使い古して痛んだ桶をもう一度桶屋が削ってつくり直したものが鮎鮎づくりにおいてベストなのである。さて今日、実用の桶をつくる職人はいるのだろうか。左寄氏を訪ねる前に吉田酒造に左寄り奥様に話を聞いてみたが、嫁いだ頃には珞珈樽に変わっており

木桶を使ったことは無いそうだが、店頭には大きな木桶が飾られていた。話もどって、左寄氏によると数年前雑誌の取材の際に編集者とその話をする大坂、堺に木桶職人がいると紹介されたそう。関西周辺で木製大桶の製造はその一軒しか無いようで、樹齢一〇〇年から一二〇年の吉野杉で主に醤油や味噌用の木桶を現在もつくられている。事情を話すと職人魂に火がついたのか予約待ちで一年以上待たなければならぬところを一ヶ月で仕込んで下さったそう。それから年に数個造っていただいているそう。祖母がご健在の間に木桶の鮎鮎を復活させ、今日もこれまでの鮎鮎と何ら変わらぬ品質を保たれている。いよいよ次に左寄氏しか入ることを許されない蔵を覗かせていただいた。綺麗に整頓された蔵には桶が整然と並んでいる。桶の中は鮎と米が順番に積層され酒樽の「お古」を設え直した木蓋に重石が載せてある。その片隅に先程から話題にしていた木桶が数個鎮座しているのを発見した。堺の職人によってつくられた桶である。聞くと桶職人が酒蔵や醤油蔵の「お古」を何気なく倉庫に備蓄されており、その材料でつくっていたそう。湿度のある蔵の壁に発酵の元(菌)がへばりついている。最後に左寄氏は「我々にとつてはお古でも何でも無いです。リサイクルという話ではなく先人からの知恵の継承です。」とそつと話された。

近江の懐は、自然の恵と脅威と同居しながら絶えず我々人間が中心ではない感覚を呼び覚ましてくれる。一尺ほどの木



魚治の蔵にて 手前に木桶がある



木桶の材でつくった木蓋



北国海道（西近江路）酒蔵の前に古い木桶が見える

桶がこれからの生業の在り方を我々に伝えているように思えた。



発酵の元になる菌が棲む蔵



冬の北湖（湖里庵より）

四、木之本の酒蔵

北国街道に北国脇往還が合流する木之本、うだつのあがる建物が数多く並ぶ魅力的な町である。古くは敦賀から長浜への中継点として栄えた町だ。木ノ本駅をおりて直ぐ東側、目の前に建つ江北図書館は今もそのことを語り伝え、養蚕で栄えたこの辺は、丁寧につくられる和弦、桑酒の生産がそれを示している。木之本宿本陣近くにある北近江の地酒「七本鎗」の富田酒造はその生業の元となる湧水の取材で以前訪れたことがある。上山の伏流水が止まることなく湧き出て、この水こそがこの地に潤いをもたらしていることは言うまでもないだろう。「戦後は

地酒蔵元が五軒あったが、今は桑酒を出す山路酒造と二軒になった。」と十四代目蔵元の富田泰伸氏は言う。いまも薬剤師第一号の免状を持つ本陣薬局、醸造業醤油屋が三軒、おばあちゃんのみ暮らしの知恵から「サラダパン」が生まれ、良質な「よもぎ」からつくられる菓匠禄兵衛の草餅は訪れると必ず口にしてしまう。落ちついた町であるが旅人を必ず満足させる町、木之本の懐に迫る。

数年前から富田泰伸氏とのご縁があり度々訪れている。富田氏の酒造りに取組む姿勢と様々な工夫を凝らした商品展開、その発信は注目を集め、止まることを知らない。

富田氏がこの何年か悩み続け、悪戦苦闘する中ようやく二〇一六年春に完成した新しい木造の酒蔵とそれが出来るまでの経緯について取材した。実は昨年夏に訪れたとき、竣工ほやほやの新酒蔵を少し見せていただいた。その時は木造の柱や所々の部位に柿渋を塗る作業を若し蔵人とされていた。今回もいつもの様に店先から中に入れていただいた。先ず始めに目にするのは瓶詰め行程の場である。次に心臓部である湧水を汲み上げる井戸。さらに奥へ向かって進み、ふと足元をみると緩やかに勾配を降りていくのがわかる。そこには酒樽ならぬホーロー引きのタンクが整然と並んでいる。タンクの底面をみると適当な大きさの板が数枚差込んである。水平を保つ為の微調整がされているのであろうか？そこで富田氏は「我が家は

ずっとこの勾配に悩まされてきたのです。まあ生まれた時からなんでこれが普通なんですけど！」とサラッと話された。そして更に奥へ行くと次にコンクリート建ての蔵がある。ここでは蒸米の作業を蔵人がされていた。比較的新しい建物であることから勾配は少しなだらかになり床面は徐々にフラットになっていった。その奥が今回のターゲットである新築の酒蔵だ。勾配を気にしながら、蒸米作業の水で滑らないように進み新蔵に入り込むと、何故かフラットが保たれている場所にたどり着いた。玄関の店先からの坂道の流れだと、ここで更に低くなるはずだが：。富田氏は温度管理がされた新しい蔵の電気をつけ「どうぞ！」と私を導いてくれた。進むと下がるどころか土間であるはずの床が柿渋を塗った板材がフラットな状態で迎えている。よく見ると板の隙間から空間が見える。整然と並ぶタンクは本当なら身の丈を遥かに超え見上げるはずであるが、ちょうど腰のあたりで終わっている。そう私の拙い描写でお気付きであろうか？既に私の立つポジジョンは中二階というべきか、勾配が下がる特徴を利用してなだらかに平屋の酒蔵の中層に導かれていたのである。そして普通ならタンクの横のハシゴを上がつて醸造が進む酒を攪拌するのであるがその中二階の板材の上に立ち腰を据え、しっかりと作業ができる状況がつけられていた。板材の下を確認すると見えていなかったタンクの胴体から底部が見えた。蔵内の中央部に位置する通路の部位にその板材が外せる仕掛けになっており、上部と下部の行き来がスムーズにでき

るよう工夫がされていた。

玄関入口からタンク内の水面をフラットに保つため、たくさん
の工夫の集積を見てきたが、この新しい蔵には更に新しい工
夫がされており気持ちがいい。建築空間としても実用性におい
ても非常に美しくスッキリとしている。「昔は低い天井に頭を
ぶつけ作業がしにくかったのです。」と富田氏はつぶやかれた。
ここでようやく富田氏と対話が始まる。彼はそもそも新築工事
を拒んでいたようだ。今日、町家再生で成功事例が多く、ここ

でも昔のままの蔵を残しながら何とか仕事ができる様にと改築
を望んでいたことを吐露された。以前、フランスのワイン農家
を見学された時にみた石造りの古いワイナリーの話を話され
た。「いまでは品質管理や製造環境設定の進歩で世界の様々な
土地でワインがつくられるが、フランスの土地の風土と長い年
月をかけ、培われたワイン製造にかなうものはないと感じた。
そのワイナリーを先代から受け継ぎ自慢げに話すオーナーの顔
を今でも思い出します。」と、更に「今の建築基準では道路から
数メートルセットバックして建てなければいけないこと、既
存の建物をキープし続けることの難しさを痛感した。」と付け
加えられた。この他のアイデアとして、いつそのこと酒米の田
圃が目の前に広がる別の広い敷地に移転することも考えたそう
だ。しかし原点に戻ってこの場所で酒造りすることに意味が
あると気付く。「狭くて作業しにくい工夫の連続のこの場所で、
蔵が大きくならずがなかったことで今日も酒造りを持続できて

いる。手狭であるが見渡せる範囲で確実に地酒づくりをキープ
できたことが今日に繋がっている。そして何よりいい水が出て
いる。」と熱く話された。新築の酒蔵の土壁は旧蔵の土を練り
直し使用しており、鬼瓦はそのまま健在させた。古い瓦は細か
く砕き中庭の小道の敷石として再利用、壁材を全て再利用する
には至らなかったが、新酒の品評を行う場所でのテーブルや棚
に使用されている。「鉄骨やコンクリートにするのではなく木
造にしたのも自分を育ててくれた町の景観を維持することを最
重要としたからであり、新築は堪え難い選択であったが、何よ
りも今このように地酒造りができることに感謝している。」と
話された。

最後に酒蔵を出て外観を眺めながら「いい時代になったから
こそ、このように考えることが出来る。先代の時代は桶売りを
せざるを得ない、他の仕事と兼ねないといけない時代だったの
かもしれない。まだまだ夢のプランはあるが、時代を見据えな
がら町（木之本）と共存していきたい。」と語られた。

酒造りは町づくりそのものだと感じたが、富田氏の話す言葉
に「まちづくり」の言葉は決して出てこない。それは本人が当
事者であることにはかならず事実がある。この懐深い町（木之
本）と共感しながらフラットの精神を保っているのだと感じた。
私が訪れた一週間前に発売が始まった富田氏の新しいアイデア
商品「ヴィンテージ山廃仕込み二〇一五年もの」を手に取り酒
蔵をでた。



新酒蔵、中庭より



旧酒蔵、中庭より



新酒蔵、裏通りより



旧酒蔵、裏通りより



新酒蔵、裏通りより



旧酒蔵、裏通りより



新酒蔵、タンクとの関係



新酒蔵、内部空間

五、八日市のジーン

八日市といえば、「左いせ、右京」である。冒頭から言葉足らずであるが御代参街道と八風街道がT字路で接するポイントにこの様に彫り込まれた道標がある。以前私はこの道標に惹きつけられ、自身の作品制作のため許可を得てその拓本をとったことがある。その地名から伊勢参り(神)と本山参り(仏)への岐路を意味する。「初めはわずかな違いでも、後には非常に大きな差になることのとえ」である。「人生の大きな岐路に立つ」とは言いすぎであろうか？

このポイントから八風街道沿いに少し東へ、アーケードの入り口が見え本町商店街が始まり昭和の匂いがしている。やはり多くのシャッターが閉まったままであるが行き交う人たちが挨拶をしあっている感じは安心感を呼ぶ。少し進むと「一人だけ元気な店」とも例えようか「FORTY NINEERS」と記された看板が掲げられた店にぶち当たった。思わず店に入ると一見、懐かしい古着屋とこだわりの商品を集めるセレクトショップである。我々世代(一九七〇年代生まれ)は誰もが一度はジーンパン(デニム)にこだわりを持った世代といって良いだろう。店の奥の方ではミシンの音が聞こえている。「なぜこの時代に八日市でこの様な店が持続しているのか？」店に対して失礼極まりない表現だが、店内を眺めていると少し様子が違うことに気づく。この八日市の元気な店に焦点を当てたい。

八〇年代の終わりから九〇年代初めを私は高校、大学時代という人生の岐路に当たる時期を過ごした。美術大学に進んだ私は当然自分の個性を出すための様々な工夫と「自分作り」をしていたことは記憶している。ファッションも当然のことながら、皆と同じものは嫌なのである。中でもジーンパンは皆が手にするがゆえに多様なモデルが売られていたことを記憶している。それは生地には様々な加工が施され、体の微妙なラインを出すために裁断や縫製の仕方にこだわりと工夫がされていた。私はジーンパンの中のジーンパン「リーバイス501」を数本持っていた。中でも糊のついた紺色というよりかダークグレーに近いものを大事にしていた。そのこだわりトレンドは更にエスカレートし、極一部の年代物をビンテージ物として扱いつつも値段に跳ね上がった。そのトレンドについて行くのに、わりと早い時期に戦線離脱したことも覚えている。当然今日もジーンパンはあるが当時(ビンテージ品)の技術による丁寧な仕上りのジーンパンを店頭で見ることがほとんどできない。さらに今日においては技術的、経済的に効率化された仕組みでなんと安価なジーンパンが流布されている状況である。

店内に戻ろう。丁寧な仕上りのジーンパンが並んでいる。早くに戦線離脱した私にさえ製品の凄みのような何か伝わってくる。デニムの生地感、縫製の糸の色、ボタン、リベット、縫製技術、ベルトループの位置などほとんど素人の私にも一つひとつがオリジナルであることが伝わってくる。(ビンテージの

本物をじっくりと見たわけではないが少なくとも当時の分業で出来上がる技術が再現されている。)ではこのジープはいつたい何なのか、右後ろのベルトループ付近に縫い付けてある皮の表示を見ると「リーバイス」ではなく「ワンピースオブロック・コナーズソーイングファクトリー」とアルファベットの花文字で印刷されたパッチが縫い付けてある。手にとつてまじまじと見ていた私にスタッフの方は声をかけられた。一息おいて「はい、すべて手仕事でつくらせていただいています。」と他のセレクト商品やビンテージ物の商品に混ざりオリジナル商品が展示されていたのだ。「さつきから聞こえてくるミシンの音は！」と聞くと「はい、お客様からオーダーを受けて作っています。」そのミシンを見せてもらおうと singer と刻まれた黒いミシンが数台おかれている。大小様々な用途のミシンが使われていた。「店から少し離れたところに工房があります。」とまたスタッフの方が声をかけてくださり案内していただいた。本町通りから少し離れたところにアーケードに沿う様な形で裏手にそのファクトリーはある。入るとそこには先程見たミシンが人ひとり通れる程の通路の左右に所狭しとたくさん並んでいる。その奥に一人、まさにそのミシンを操り大小のミシンを巧みに使いこなす職人がいる。しばらく操り続け仕事のきりを見て職人はこつちを向いた。帽子のつばに手を当て「オーナーの小中です。」と、まさかと思つたがこの城の主がこの人、小中儀明さんである。オーナーや社長といえは営業に行くか、コン

ピュータの前で商品管理や買付け準備などのイメージである。大学を出てから店を任せられ、古着とセレクトショップで店を展開してきた。五年前からジープを一からすべてを自分の手で裁断・縫製を操り、販売も行なっている。一九四〇年代から五〇年代頃の、ものづくりが発展して行く時代の丁寧な作りに敬意を払っている。先にも触れたが大量生産に入る頃の生産手順はすべての工程が分業化されていく時期である。手仕事から機械化へ移る時代のものづくりにははかることのできない丁寧な技術が要素所に見て取れる。「それを俺は忠実にやりたい！その当時のミシンを使いすべて当時のやり方でやりたいのです。」と小中氏は強く語った。「第二次大戦中は国(アメリカ)からの統制がかかり質を落とさざるを得なかった。それでも当時の工夫が見て取れる。」小中氏の考え方やスタンスに共鳴する全国のジープコレクターからすでに数百本の予約が入っており、日々製造と工夫、模索をしているとのことである。面白いことにこのジープはインターネット販売を一切受け付けない。欲しい人は必ずこの八日市の店を訪れ彼と対話した上、予約を受けて小中氏の手によって製造される。しかし小中氏はまだ納得はしていない様である。現在の布地は帆布製造でまちづくりに成功している岡山から自分のオーダーしたものを送っていただいてるそうだ。この機械り、布地づくりを自らの手で挑戦したいと。正にゼロからの構想を彼は夢見ている。

しかしそれは夢ではないかもしれない。役目を果たし、使用

されなくなった特殊な縫製が可能なミシンが世界のあちこちに残っている。職人達のネットワークで八日市の小中氏のことが知れ渡り、ミシンが八日市に送られてくるそうだ。そしてミシンは小中氏の手によってメンテナンスされ、ジーンズの特有の縫製がなされ蘇るのである。それはもしかすると経済効率優先の時代から確かなものづくりを理解し価値を共有する時代に動いているのかもしれない。インターネット、SNSは時間と場所を超えてつなげていくのだ。

これまでは日本が近代社会になる以前から受け継がれた手仕事を今日のあり方にみながら再確認することが主だったように思う。八日市では戦後の高度成長期を共に歩み、新たなカルチャーを超えて産み出された物作りに焦点を当てた。これも近江の地であるからこそ受け継がれた精神が反映していると考えたい。

米国カリフォルニアがゴールドラッシュに沸いた一八四八年からその翌年の四九年にそこで汗を流した人々を「49ers」と呼ぶ。彼らが使っていた作業着こそが大量生産を導いたジーンズでありデニムである。そして若者のトレンドとなりスタイルとなった。大量生産でしかできなかったそれをこの時代になつたからこそ、小中氏がつくる様な唯一無二のジーンズが出来るのかもしれない。誰がつくった製品かわからないものづくりの時代から作り手と買い手が確実に対話する時代が来ている。ここには近代を超越した持続可能社会へと向かう萌芽を



ファクトリーにてミシンを操る小中氏



御代参街道(本町通り)にFORTYNINERSの店がある



大戦モデルと呼ばれるデニムジャケット(ジージャン)



小中氏がつくるジーンズ。s409xxx



リベットとそのミシン



アーケードの裏手にファクトリーがある

感じる。みんなで次世代を支え合う時代の到来である。ブランド名にある「One Piece of Rock」には「一枚岩」の意味が込められている。

岐路に立たされている時代に道標のある町の元気な職人には次の行き先が見えている。

追記

二〇一六年十二月より二〇一七年三月まで滋賀県文化振興事業団、二〇一七年四月より二〇一七年九月までびわ湖芸術文化財団が発行する『湖国と文化』に「近江の懐」と題して近江の宿場町におけるものづくりやそこで育まれた精神性、次世代に

つなげる新たな価値を写真と文で紹介する機会をあたえられた。現在まで五回の連載が継続されており、第一回から第四回までのオリジナル文を可能な限り残し、近江学研究紀要として再編集した。紀要の冒頭は二〇一八年一月現在における私自身の現況報告から始め、次に美術家目線でこれまでに見てきた近江におけるものづくりの有り様と精神、それを受け入れる受け皿、土台、懐の深さとも言えようものに焦点を絞るように心がけた。昨今は「ものづくりからことづくり」と呼ばれるようになった。それは、見た目や目先、側^{がわ}だけでは騙されないしつかりとしたものづくりにおける動機、理由や由縁、物語が必要となりその背景となる歴史も含めた総体が価値として判断されてきていると感じる。良い意味で「目利き」が必要な時代になってきたのであろう。

近江学研究所の『研究紀要』第三号、第六号まで四回にわたって「近江の水をめぐる」と題して水源について記す機会をいただいた。水源を辿ることは水脈を辿ることでもある。辿るプロセスにおいて必ずその周辺に生業があり、そこには後世の我々に告げるものづくりから生み出される物言わぬメッセージが存在する。誰からも頼まれることなく美術表現を志す私がいち早くそれに気づき、感じ取り、伝えていきたい気持ちである。またそのものづくりを決定づける条件が整っていることや、それを許す環境が他ならぬ。近江の懐、そのものであると感じている。まずは水源を求め水脈を辿る。主要幹線道路から小道を抜

け街道筋へ、宿場町を探り出しそこには必ずキーパーソンがいる。そのような出会いを求めながら探究を持続したいと意気込んでいる。

執筆者一覧 (掲載順)

小嵯 善通 成安造形大学教授 附属近江学研究所研究員

吉村 俊昭 成安造形大学教授 附属近江学研究所研究員

加藤 賢治 成安造形大学准教授 附属近江学研究所副所長・研究員

石川 亮 成安造形大学助教 附属近江学研究所研究員



編集後記

今冬は、韓国平昌でのオリンピックに日本中が沸いています。世界がつながっていると感じると共に、たくさんのかげがえのない文化や人で世界が成り立っていることを実感します。

本紀要では本学研究員から4編の論考が寄せられました。小嵯研究員は、福田平八郎が昭和七年に琵琶湖を描いた「漣」の作風の特色について画家のことは引用して考察しています。吉村研究員は、奥琵琶湖の菅浦集落を訪ね、聞き取りによる人々の暮らしやその変遷を紹介しています。この2編は、本研究所発行「文化誌近江学第10号（琵琶湖特集号）」に掲載した記事に字数の制約などで割愛した内容などを補足したものです。合わせてお読みいただくと幸いです。加藤研究員は、本学近郊の仰木集落に息づく地藏信仰について掘り下げて検証しています。石川研究員は、近江にいきづく生業を支え伝える人、もの、手技、精神などとの出会いを、聞き取りを通して紹介しています。

いずれも、近江という地域の持つ個性、固有性を深く掘り下げることにより、幅広く多くの人たちが共感する普遍的な美、新しい価値観や再発見につながっています。この先の未来につながるような研究を今後も積み重ねてまいります。よろしく願いいたします。

編集担当 永江 弘之（附属近江学研究所研究員）

成安造形大学附属近江学研究所紀要 第7号

発行日 平成30年3月26日

発行 学校法人京都成安学園 成安造形大学 附属近江学研究所
〒520-0248 滋賀県大津市仰木の里東4-3-1
電話 077-574-2118

発行者 西久松吉雄

編集 成安造形大学附属近江学研究所

印刷所 宮川印刷株式会社

©Seian University of Art and Design 2018

ISSN 2186-6937